

巻 頭 言

令和元年度から始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行は、アルファ株、デルタ株、オミクロン株等へ変異を繰り返しながら、令和4年度においてもなお収まらず、マスクの着用やソーシャルディスタンスの確保等の対応を余儀なくされ、地域ケア総合センターの活動にも影響を与えました。

一方で、オミクロン株については、若者の重症化リスクが低く、大部分の人は感染しても軽症で入院を要しないことが明らかとなったため、国は患者発生のおお数届出や自宅療養期間を見直すなど、感染拡大防止と社会経済活動の両立を図る「With コロナ」の方針へと舵を切っていました。

そのような状況の中、本センターではこれまで培ってきたノウハウを活用し、各事業の性質に応じて、対面・オンライン・ハイブリッドの各方式を適切に使い分けることにより、引き続き感染防止対策に万全を期しながらも、活発な活動を実施することができました。その活動の具体的な状況については、本誌をご覧くださいと存じます。

さて、医療及び介護の分野では、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるように、地域包括ケアシステムの構築を目指し、在宅医療の提供体制の強化等が推進されてまいりましたが、それぞれの地域の人口動態や社会資源等は異なっており、地域で暮らす一人一人の方が安心した生活を送るには、地域の状況に応じた柔軟なシステムづくりと木目細かな支援、そしてそれらを支える人材の育成が不可欠です。

本センターでは、そういった課題に対して、各地方自治体や地域の核となる医療機関等と連携を取りながら、医療現場や地域で暮らす方々のニーズを拾い上げ、各事業のテーマを練り上げることにより、石川県立看護大学が持つ知見を地域へと還元する取り組みを行ってまいりましたが、国連総会が2021年から2030年の期間を「健康長寿のための10年間(Decade of Healthy Ageing)」と位置付けたように、今後は、ただ寿命を延ばすのではなく、健康寿命を延ばす、つまり幸せに過ごせる時間を延ばすことに視座を据える姿勢が一層重要になると考えております。

また、社会のIT化がさらに進み、モバイルが全ての世代に日常的に利用されるようになり、企業のみならず教育機関を含め、あらゆる事業体にDX（デジタルトランスフォーメーション）が求められる時代となりました。

本センターとしても、そうした社会構造の変化を鋭敏に受け止め、積極的にIT技術を取り入れながら、既存の常識や手法に捉われないことなく、看護の新しい可能性を探究してまいりたいと思います。

最後に、応援して下さった地域の皆さまの励ましと協力に感謝を申し上げるとともに、センター長をはじめとしたこのセンターにかかわる教職員のご尽力に御礼を申し上げます。

石川県公立大学法人 石川県立看護大学
学長 真田 弘美

ご挨拶

日頃から、石川県立看護大学附属地域ケア総合センターの事業にご協力いただき、誠にありがとうございます。

2022年度は、企画段階から新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染予防対策を準備していた関係で、ほとんどの事業を開催することができました。人材育成事業として13事業、地域連携・貢献事業として11事業、国際貢献事業としては1事業を実施しました。

また、大学コンソーシアム石川地域連携専門部会では、令和4年度地域課題研究ゼミナール支援事業の地域共創支援枠に応募し、「壮年期の運動不足を解消する実践的アプローチについて」が優秀賞を受賞しました。

地域連携・貢献事業では、残念ながら能登の祭りへの参加はできませんでしたが、地区公民館まつりでの活動展示への参加などで交流を持つことができました。また、秋晴れの中、3年ぶりに開催された能登町主催のマラソン大会では、「看護大健康キャンペーンテント」を設け、学生と教員による健康支援を行い、多くの住民の皆様と交流することができ、天候だけでなく心も清々しい1日となりました。また、かほく市のいきいきステーションと協力した「いきいき世代とつくる健康教室」を5回実施、またFMかほくによる看護大学によるミニ健康講座に出演し、かほく市等の住民の皆様方に本学の知見を還元することができました。

人材育成事業では、事例検討会のほか、さまざまな研修会を開催することができました。

国際貢献事業のうち、JICA 日系研修については、COVID-19による感染は世界的に減少傾向にありましたが、昨年同様、パラグアイから研修員を本学に招くことはできず、ZOOM テレビ会議システムを用いた開催で、4名の参加がありました。さらに、これまでに研修に参加経験のある10名がサポートとして参加し、報告会では、12時間の時差があるとは思えないほど活発な意見交換が行われました。

このように、コロナ禍の状況の中、感染対策に十分に注意し、また、開催方法を工夫しながらさまざまな事業を開催することができたことは、誠に喜ばしく思います。

5月にCOVID-19の感染症法上の位置づけが5類に移行される予定であり、元の生活に戻りつつありますが、気を緩めることなく、今後も、さまざまな手法を取り入れ、地域に開かれたセンターを目指してまいりたいと考えております。

石川県公立大学法人 石川県立看護大学 附属地域ケア総合センター
センター長 塚田 久恵

目次

(ページ)

1	人材育成事業	
1-1	専門職研修	
1-1-1	ご当地版 在宅療養移行支援システム創り	1
1-1-2	いしかわマネジメント塾	3
1-2	本学教員主催の研究会・事例検討会	
1-2-1	多職種間連携のための事例検討	5
1-2-2	ペリネイタル・グリーフケア検討会	7
1-2-3	感性を磨く事例検討会	10
1-2-4	多職種とともに考えるがん患者の事例検討会	12
1-2-5	クリティカルケア看護師のための事例検討会	15
1-2-6	CNS関係者による看護事例検討会	16
1-2-7	褥瘡管理スキルアップ研修会	18
1-2-8	新人助産師のスキルアップ研修	19
1-2-9	看護に活かすポケットエコーを一つ一つわかりやすく	20
1-2-10	臨床で行うリンパ浮腫のケア	22
1-2-11	看護研究に活かせる現象学を楽しく学ぼう	24
1-3	相談サービス事業	
1-3-1	各種研修会等への講師派遣事業	26
1-3-2	病院への事例・活動・研究等の指導助言実施状況 (再掲)	27
2	地域連携・貢献事業	
2-1	地域連携・貢献事業	
2-1-1	終末期看護実践の悩みを共に語り心も体もリフレッシュ	29
2-1-2	ひとりで悩まないで！子どもをもつ乳がんサバイバー同士で語り合おう	31
2-1-3	パーキンソン病いきいきリハビリ教室	33
2-1-4	わたしと地域の未来を変革するSDGs	35
2-1-5	いきいき世代とつくる健康教室 (地域公開講座)	38
2-1-6	あかちゃんをお空にみ送られた方の自助グループに対するサポート活動	40
2-1-7	子育てどろっふ・イン・さろん	42
2-1-8	小・中・高校生と考える防災 ～知ろう災害、守ろう大切な命と生活～	45
2-1-9	モーニング Walk&Eat	47
2-1-10	スマート ウォーキング	48
3	国際貢献事業	
3-1	JICA 日系研修「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」コース	49
4	その他	
4-1	かほく市との包括的連携協定に関わる取り組み	53

1-1 専門職研修

1-1-1 ご当地版 在宅療養移行支援システム創り

企画担当：石川 倫子 / 基礎看護学 教授

1. 事業の目的

能登北部地区で療養生活を送るために必要な在宅療養移行支援システムについて、各病院の事例を通して可視化し共有して、ご当地ならではのシステムを創る。

2. 実施状況

開催日時：令和4年10月15日（土）13:00～15:00

開催方法：オンライン（Zoom）

参加者数：58名

開催内容：第1部 13:00～14:30 精神疾患のある患者の術後の在宅移行支援

事例提供：珠洲市総合病院

第2部 14:30～15:00 住み慣れた家で最期を看取るために

事例提供：公立宇出津総合病院

司 会：石川倫子（石川県立看護大学 基礎看護学 教授）

助 言 者：山中由貴子（公立羽咋病院 医療サービス推進室室長）

酢谷美和子（志賀町役場健康福祉課）

3. 実施内容

第1部の事例では、退院後2～3か月、患者の在宅生活が安定するまで支援をする大切さ、更に移行期の向こうを見据えた支援が必要になる。「近所に住む病院看護師に気にかけてもらう」というご当地ならではの支援も大切なシステムの一つだと再認識した。

第2部の事例では、患者の思いに沿った看護がなされていたことを患者と看護師との対話からよく伝わる事例であった。「住み慣れた家で最期を看取る」ための体制の工夫、そして公立羽咋病院での病院と在宅医とのつながりづくりを学び、志賀町での見取りのためのシステム創りには行政の努力に、参加者皆が感動した。

2事例ともに、その町ならではの支援・システムがあり、『地域みんな』でその人らしく生ききる支援を行っていた。その町ならではの在宅療養移行支援システムを創るためには、事例で検討し可視化することでさらなるシステム創りにつながることを確信した。



4. 評価と今後の課題

これまでの4年間で看護職等の在宅療養移行支援の理解を深め、システム創りの要である看護管理者の研修を行ってきた。各病院がそれぞれに行っているシステム創りを、事例を通して可視化することでシステムを構築できる。

次年度も事例検討を通して各病院独自の在宅療養移行支援システム創りを検討していきたい。

さらに、再入院の原因や見取りのできない原因を解決できる施策を考えていきたい。

1-1-2 いしかわマネジメント塾

企画担当：石川 倫子 / 基礎看護学 教授

1. 事業の目的

看護現場で管理者が経験しているものがたりを伝え、話し合う参加型学習から、看護現場でのマネジメントや人に関わる多様な課題解決への糸口を見つけ合う。

2. 実施状況

開催回数：8回（2022年4月～11月に月1回開催）

開催方法：4月～6月 対面による集合研修

7月～11月 web研修

進行方法：各回の研修テーマについて、以下のスケジュールで実施（webも同様）

○開催時間：13：30～16：00

- ・ガイダンス : 10分
- ・ミニレクチャー : 40分
- ・グループワーク : 60分
- ・全体討議とまとめ : 40分

各回ファシリテーター：田村幸恵（石川県立看護大学 基礎看護学 講師）

瀬戸清華（石川県立看護大学 基礎看護学 助教）

千田明日香（石川県立看護大学 基礎看護学 助教）

池田富三香（石川県立看護大学 特任准教授）

3. 実施内容

第1回	2022.4.23（土）	マネジメントの源泉に出会う	講師：丸岡直子（石川県立看護大学 名誉教授）	参加者 25名
第2回	2022.5.21（土）	リーダーシップと感情知能	講師：丸岡直子	参加者 23名
第3回	2022.6.18（土）	心理的安全性のある組織づくり	講師：石川倫子	参加者 24名
第4回	2022.7.23（土）	人の強みをみつけて活かす	講師：丸岡直子	参加者 21名
第5回	2022.8.27（土）	任すこと・任されること	講師：池田富三香	参加者 18名
第6回	2022.9.24（土）	経験から学ぶ力を育む	講師：丸岡直子	参加者 14名
第7回	2022.10.29（土）	仲間づくり……チームング	講師：丸岡直子	参加者 13名
第8回	2022.11.26（土）	やる気になる・やる気にさせる組織	講師：丸岡直子	参加者 15名

各回のテーマは、日ごろ看護管理者が直面している課題とした。

その課題に対して基本的な講義を聞いたうえで、自分自身の体験を思い起こしてグループワークで共有する形式ですすめた。

同じテーマで他施設の管理者はどのような体験をし、どのように対応しているのか意見交換することによって、日ごろの悩みの解決の糸口を見つけ、次の行動変容にむけての前向きな意欲がわいたとの意見が寄せられた。

参加者は、自身が興味のあるテーマを選んで参加することができるので、グループワークは積極的に参加できた。複数回参加した者も10名以上あり、メンバー同士のつながりも生まれ、日ごろ接することが少ない地域や施設の看護管理者と交流することができた。

4. 評価と今後の課題

初めての企画だったが、参加者から次のような意見があった。

「他の病院の同じ立場の方と意見交換できる場が持て、話すことでとても刺激になりました。」

「自身のモチベーションを持続させ、ヒントや気づきをいただいていた。」

「気軽に参加できて自分の振り返りになる「場」だと思いました。」

「院内の管理者研修に、このような形式の研修会をとりいれたいと考えています。」

これらから、実施目的は概ね達成できた。

「対面でできるといいですね。」の意見とともに、「移動時間がなく、時間を有効に使える Zoom 研修を今後も希望したい。」や「Zoom がいい。」との意見も寄せられた。

県内全体を対象としているので、移動時間が長い地域のことを考慮することが重要である。

また、地域ごとに管理者自らが開催できるよう支援することについて検討したい。



1-2 本学教員主催の研究会・事例検討会

1-2-1 多職種間連携のための事例検討

企画担当：川島 和代 / 老年看護学 教授

1. 事業の目的

本事例検討会は、病期と生活の場が移行し、多重課題を抱える対象へ最善のケアを提供するために、看護職間および看護職と他職種間が連携して、対象の特性を的確に捉え、看護実践の適切な評価について学習支援を目的に開催する。

2. 実施状況

【第1回】

開催日時：令和4年9月3日（土）13:30～16:00

開催場所：石川県立看護大学管理棟大会議室

参加者数：20名（看護職15名、看護教員（元教員含む）5名）

【第2回】

開催日時：令和5年3月4日（土）13:30～16:00

開催場所：石川県立看護大学管理棟大会議室

参加者数：24名（看護職20名、看護教員（元教員含む）5名）

3. 実施内容

【概要】

事例提供者から事例提供の理由を説明頂き事例紹介してもらう。参加者間における質疑応答を行う。その後、グループワークを通して対象特性を明らかにし、患者の持てる力、看護の方向性を見出す。グループごとに発表し、参加者間の対象像と看護の方向性の確認を行う。看護実践場面の再構成（プロセスレコード）の報告があった場合は、その看護実践が看護の方向性に添って患者を整えた（看護できた）と言えるのか相互評価を行う。グループワークには参加者の自由な意見を引き出し、グループダイナミクスが働くようチューター役のメンバーを配置する。

倫理的配慮：事前に事例検討会の内容を知り得る者は参加者だけとし、当該事例検討会に使用した資料はナンバリングし、すべて回収・廃棄とした。

【第1回】

《事例提供の理由》

認知症を有する高齢者が脳血管障害にて入院。入院中は転倒や点滴自己抜去などの危険行動があり、ケアに対する抵抗もあった。患者に対して治療やケアの必要性を説明するが理解が得られず対応に困難を感じた。やむなく身体拘束を実施したが、患者の険しい表情を見るとどうしたらいいのだろうと看護職者もつらい思いになった。**（患者の対象特性のとらえなおし、看護の方向性の確認）**

《事例紹介》

70歳代後半男性、脳血管障害にて入院、左半身麻痺あり。発症から3か月経過、ADLは全介助、嚥下機能の低下で経口摂取ができず胃瘻（ボタン式）を造設した。急性期病棟から地域包括ケア病棟へ異動。療養型病院への退院調整の段階。既往歴は糖尿病、高血圧、脳梗塞。家族背景は妻と二人暮らし、長女は近隣、長男は県外在住。

【第2回】

《事例提供の理由》

看護職者への暴言・暴力により強制的に退院となった患者に対して、家族は本当に困っていると言われ、どのように対応していけばよかったのか明確な対応について導き出せず事例検討を希望された。(対応困難事例、看護実践の振り返り・評価)

《事例紹介》

80歳代前半男性、既往歴は2型糖尿病、下肢ASO(両側 特に右)、認知症

50歳代に右下腿骨骨折で身体障害者認定、左脳幹ラクナ梗塞あり、転倒リスクあり、同居家族あり。今回、日常生活能力が低下、家族から介護困難を理由に身体機能の維持、介護保険申請・サービス調整目的の入院であった。認知症という病名に危険と思われる杖等を持ち込まない方針とした。

4. 評価と今後の課題

【第1回】

認知症を有する高齢者の特性を理解するとともに、脳血管障害の発症、入院、身体拘束、転棟がもたらすダメージを患者の位置から描きなおし、不快な体験として参加者全体で共有することができた。ケアに抵抗する患者の行動の意味が共有できると患者にどのような看護が必要か、臨床看護師の活発な意見が出された。その人が今まで培ってきた力、人とコミュニケーションできる力が残されていること、家族の存在など社会力を活用しながら、看護実践する意味が共有できた。

入院・入所場所を移動する場合には看護職者間、スタッフ間の連携の重要性も確認できた。

【第2回】

本人の希望とは異なる家族の意思で入院、杖の使用を認めないなど本人の意思に反した対応方針が患者の感情を乱したことを共有できた。病院の規則等と患者の意思とにずれが生じた場合の調整や看護の方向性を再検討する必要性が明らかにされた。

《第2回目にアンケート結果を実施し、満足度の高い評価を得た。》

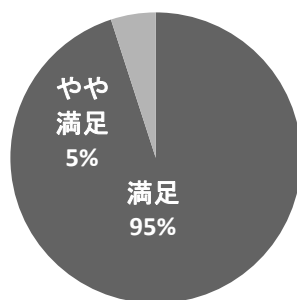


図1. 研修会参加の満足度



図2. 研修内容の活用の可否

1-2-2 ペリネイタル・グリーフケア検討会

企画担当：米田 昌代 / 母性看護学 教授

1. 事業の目的

グリーフケアの実践を学び、地域連携の構築をはかることによって、ペリネイタル・グリーフケアの充実をはかる。

2. 実施状況

【第27回】

開催日時：令和4年7月17日（日）

開催場所：石川県立看護大学（ハイブリッド開催）

開催内容：第1部 10:00～12:00

テーマ「グリーフケアに関する基本的知識と関わり方の基本について」

企画委員のロールプレイ及び質疑応答・施設間の交流

参加者 23名（うちオンライン13名）

第2部 13:30～16:00

テーマ「不妊症・不育症患者への支援を考える その1～多職種・ピアサポーターとの連携～」

13:30～13:50 情報提供

- ・不妊症・不育症ピアサポーター等養成研修について
- ・不妊治療費の保険適応・移行期の石川県の不妊治療助成と相談窓口について
- ・卒業研究発表（第19期生石出舞）「不育症女性の心理についての文献研究」

13:50～14:30 「鍼灸師としての不妊・不育症女性とのかかわり」

講師：田中良和（二葉鍼灸療院）

14:30～15:10 「不妊治療経験者としての体験から現在のピアサポーターとなるまでの経緯・不妊女性が望む支援と多職種との連携のあり方について」

15:10 休憩

15:20～15:35 グループ間交流 4～5人×5G

15:35～16:00 全体交流 講師からのコメント 次回のお知らせ

参加者 22名（うちオンライン13名）

【第28回】

開催日時：令和5年2月19日（日）

開催場所：石川県立看護大学（ハイブリッド開催）

開催内容：第1部 10:00～12:00

テーマ「グリーフケアに関する基本的知識と関わり方の基本について」

企画委員のロールプレイ及び質疑応答・施設間の交流

参加者 23名（うちオンライン10名）

第2部 13:30～16:00

テーマ「不妊症・不育症患者への支援を考える その2～看護専門職・研究者の見解を知ろう～」

13:30～13:35 情報提供 不妊症・不育症ピアサポーター等養成研修について

13:35～14:05	「不妊相談を通して、みえてくるもの」 講師：吉川 由起子（よしかわ助産院院長・石川県不妊相談センター相談員）
14:05～14:55	「不育症の検査治療の実際と検査治療中～妊娠後の女性の思い 研究を通して支援を考える」 講師：二川香里（富山大学学術研究部医学系母性看護学講座）
14:55	休憩
15:05～15:35	グループ間交流 質問・感想 4～5人×6G
15:35～16:00	全体交流 講師からのコメント 次回のお知らせ 参加者 26名（うちオンライン12名）

3. 実施内容

今年度より周産期のグリーフケア初学者のための第1部（午前の部）を企画し、グリーフケアに関する基本的知識と関わり方の基本について、企画委員のロールプレイを交えて学んだ後、会場からの質問に回答し、施設間の交流をはかった。

また、昨年より国を挙げて「不妊症・不育症ピアサポーター等養成研修」が開始されたことを受けて、今年度の大テーマを「不妊症・不育症患者への支援を考える」とした。

【第27回】

まず、米田から厚生労働省が昨年度より日本助産師会に委託し、開催している「不妊症・不育症ピアサポーター等養成研修」と「不妊治療費の保険適応について」「移行期の石川県の助成と相談窓口について」の情報提供をした。次に昨年度の卒業生石出舞が「不育症女性の心理についての文献研究」に取り組んだ結果について発表させていただいた。その後、本日のテーマにまつわる講師である鍼灸で不妊治療患者に関わる二葉鍼灸療院院長、鍼灸師の田中良和氏と不妊治療体験者でピアサポーターである坂口みゆき氏にお話しいただいた。田中氏からは鍼灸での不妊治療の実際、受療状況、患者対応で心を配っていること、多職種との連携の在り方について語っていただき、坂口氏には体験談を中心に、不妊治療にいたるまでの経緯、不妊治療中の思い、現在ピアサポーターとしての活動についてお話いただいた。

その後、対面・オンラインとも2グループずつに分かれて、お話を聞いての感想、質問を話し合っていた後、グループごとに話し合われた内容や出された質問を共有・発表し、講師にコメントしていただいた。

【第28回】

まず、米田から「不妊症・不育症ピアサポーター等養成研修」の実際について情報提供をした。その後、本日のテーマにまつわる講師である石川県不妊相談センター相談員でよしかわ助産院院長吉川由起子氏と不育症の支援について研究されている富山大学学術研究部医学系母性看護学講座の二川香里氏にお話しいただいた。吉川氏からは石川県不妊相談センターについての情報、相談の状況を実際の事例も交えながらお話していただき、二川氏には不育症に関する一般的知識をおさえつつ、研究結果に基づき、不育症女性の心理とその支援についてお話いただいた。

その後、対面2グループ・オンライン4グループずつに分かれて、お話を聞いての感想、質問を話し合っていた後、グループごとに話し合われた内容や出された質問を共有・発表し、講師にコメントしていただいた。

4. 評価と今後の課題

【第27回】

開催後のアンケート結果では、第I部に関しては、全参加者が内容・方法に関して満足と回答し、今後に活かせると回答していた。感想として、「ロールプレイで実際の声かけを見ることができたので参考になった」「改めて自分のケアを見直すきっかけとなった」「それぞれの施設

の対応を聞くことができた」と満足は高かったが、声が小さく聞こえにくかったという意見もあり、次回からは音声への対応を強化していきたい。第Ⅱ部については内容については全参加者が満足と回答し、方法・場所、今後に活かせるかについて9割以上の参加者が満足・活かせると回答していた。感想として、「新しい知識を得ることができた」「それぞれの講師の直の体験を聞いて、不妊患者の思いを知れた」「助産師として、不妊治療体験者としてこの先のようなことができるか具体的に知ることができた」「寄り添いながらケアをしていきたい」と今後のケアに活かせる有意義なものとなっていた。

【第28回】

開催後のアンケート結果では、第Ⅰ部に関しては、オンラインでの音声トラブルはあったものの9割以上の参加者が内容・方法に関して満足と回答し、今後に活かせると回答していた。感想として、「ロールプレイで実際の声かけがリアルでわかりやすかった」「他施設、いろんな立場の人と話ができ視野が広がった」「自分の気持ちや考えを言語化する機会になって、次につながることができそうと思えた」と満足度は高かった。第Ⅱ部に関して内容については全参加者が満足と回答し、方法・場所、今後に活かせるかについて全参加者が満足・活かせると回答していた。感想として、「不妊不育症の知識を得られただけでなく、事例から女性の実際の声、具体的な支援方法を聞くことができ、とても貴重な時間だった」「グループワークがあり、他の病院での取り組みや行政ではどのような思いがあるのか知ることができ、有意義な時間を過ごせた」「気持ちに配慮しながらコミュニケーションをとることができそう」と今後のケアに活かせる有意義なものとなっていた。

今年度もコロナ禍が持続しており、Zoomでの開催であった。3年目ということで、参加者も慣れてきており、当日大きなトラブルもなく、進行できたが、ロールプレイ時の音声環境についてはまだ不十分であるため、改善していく必要がある。講師も含め、遠方からの参加が可能となり、他県の人々との交流をすることもできるため、今後もコロナ禍に関係なく、ハイブリッドでの企画を継続していきたい。企画委員ともZoom会議等を活用して意見交換を継続し、今後も保健師さんや体験者の方々とも連携して開催していきたいと考える。



第Ⅰ部 ロールプレイの様子



第Ⅱ部

1-2-3 感性を磨く事例検討会

企画担当：美濃 由紀子 / 精神看護学 教授

1. 事業の目的

職場外で多職種と共に困難事例について検討することのできる安心・安全な語りの場を提供すること。

また、患者、援助者、患者 - 援助者関係、臨床状況、という事例の4局面に視野を広げ、援助者の感情に焦点を当てた事例の包括的なアセスメントを通じて、患者理解のための援助者の感性を培い、参加者のエンパワメントを目指す。

2. 実施状況

(1) 開催日程

令和4年5月から令和5年1月までに計8回実施し、累計118名の参加があった。

開催回	日時	参加者数
1	令和4年5月12日(木) 18:30～20:30	16名
2	令和4年6月9日(木) 18:30～20:30	19名
3	令和4年7月14日(木) 18:30～20:30	12名
4	令和4年9月8日(木) 18:30～20:30	16名
5	令和4年10月13日(木) 18:30～20:30	14名
6	令和4年11月10日(木) 18:30～20:30	13名
7	令和4年12月8日(木) 18:30～20:30	13名
8	令和5年1月12日(木) 18:30～20:30	15名
参加者総数		118名

(2) 開催場所

全てオンライン (Zoom) で実施した。

(3) 参加申込者の属性

①職種

看護師	保健師	助産師	その他
81.3%	10.4%	4.2%	4.2%

②主たる業務に加えて担っている役割

専門看護師	認定看護師	教育職	管理職	大学院生	医学部生	その他
6.5%	19.4%	29%	3.2%	16.1%	6.5%	19.4%

(4) 講師等

スーパーバイザー：宮本眞巳（東京医科歯科大学 名誉教授）

コーディネーター：美濃由紀子（石川県立看護大学 精神看護学 教授）

大江真吾（石川県立看護大学 精神看護学 講師）

事務局：高濱圭子（石川県立看護大学 精神看護学 助教）

川俣文乃（石川県立看護大学 精神看護学 助教）

3. 実施内容

各月、事例提供を募り、事例の4局面（患者、援助者、患者 - 援助者関係、臨床状況）に沿いながら検討を進めた。参加者は、県内のみならず全国から集まったことにより、各地域によるケアの傾向が浮かび上がった。拠点を異にする援助職どうしの交流は、ケアにおける地域間格差をなくし、ケアの改善に役立つと好評を得た。オンラインでの開催という利点を活かしたことで、これらの成果が得られたと考えられる。

検討会では、参加者が自身の感情に焦点を当てることの意味や、否定的感情の意味について考える価値への気づきが得られた。そして、援助者の感情への注目は対象のニーズアセスメントの精度向上に繋がると実感できたことが語られた。検討会中には、プロセスレコードを用いた場面の振り返りを行うことで、提供者を含む参加者全員の対人援助の能力向上に繋がる取り組みとなったと考えられた。事例提供者からは、「いつもと違う場で話すことができてすっきりした」「困難事例と関わっていて苦しかったが、希望が見えた」等、エンパワメントされたという内容の発言が多く聞かれた。

4. 評価と今後の課題

(1) 評価

包括的な事例アセスメントによって新たなケアの方策を見出し、その実現のためのエネルギーを事例提供者に獲得してもらうことができている。事例提供者の感情に焦点を当てながら、参加者の率直な思いも表現できる検討会の場は、事例提供者のみならず、参加者全員へのエンパワメントをもたらしている。

(2) 今後の課題

より深い意思疎通やコミュニケーションを図りたいと対面開催を望む参加者の希望に応えられるよう、対面と遠隔のハイブリッド型での事例検討会を企画していく必要がある。参加者の多様性が検討会を活性化すると考えられるため、広報活動に注力してさまざまな背景および属性を持つ参加者の獲得を目指す。また、本事業の効果を測定するため、参加者の協力を得ながら調査を実施したい。調査結果に基づいて、これまで蓄積されてきた事例検討の方法論をさらに発展、醸成し全国へ広めていく。

1-2-4 多職種とともに考えるがん患者の事例検討会

企画担当：松本 智里 / 成人看護学 准教授

1. 事業の目的

多職種とともに施設の垣根を越えて、日頃のがん患者や家族へのケアについて事例検討することで、様々なライフステージのがん患者に対応できる看護師、医療従事者を育成する。

2. 実施状況

開催回数：6回（令和4年6月～令和5年3月）

- ① 6月7日(火) ② 8月2日(火) ③ 10月4日(火) ④ 12月6日(火)
⑤ 2月7日(火) ⑥ 3月7日(火)

開催時間：17:45～18:45（事例検討 45分・ミニレクチャー 15分）

開催方法：全てオンライン（Zoom）

3. 実施内容

【第1回】令和4年6月7日：参加者数120名

テーマ「エンドステージを感じる患者の心の揺れへのケア ～共に生じる看護師の葛藤～」

事例提供者：野口麻衣（福井県済生会病院 看護師）

ミニレクチャー「患者の揺れ動く気持ちに向き合う看護」

講師：松本友梨子（福井県済生会病院 がん看護専門看護師）

【第2回】令和4年8月2日：参加者数89名

テーマ「AYA世代の肺がん患者へのケア ～アンメットニーズを知る～」

事例提供者・講師：道渕路子（金沢医科大学病院 がん性疼痛看護認定看護師）

橋本玲子（金沢医科大学病院 公認心理師・臨床心理士）

上埜千春（金沢医科大学病院 がん看護専門看護師）

【第3回】令和4年10月4日：参加者数102名

テーマ「最期まで化学療法希望する若年成人がん患者の意志決定支援における看護師の苦悩」

事例提供者：辻瑠璃子（福井大学医学部附属病院 看護師）

若林未来也（福井大学医学部附属病院 看護師）

ミニレクチャー「アドバンス・ケア・プランニングの実践について」で

講師：高野智早（福井大学医学部附属病院 がん看護専門看護師）

【第4回】令和4年12月6日：参加者数90名

テーマ「家族から直接依頼があった終末期がん患者の在宅療養支援」

ミニレクチャー「知っていますか？ 在宅でのがんの療養を支える訪問看護」

事例提供者・講師：時山麻美（訪問看護ナースソフィアにいかわ がん看護専門看護師）

【第5回】令和5年2月7日：参加者数94名

テーマ「小児期に発症したがん経験者の晩期合併症 ～親から自分自身で対応できるような移行期支援～」

ミニレクチャー「小児・AYA世代がん経験者の長期フォローアップ 日本の中での動きについて」

事例提供者・講師：樋口 麻衣子（富山大学附属病院 がん看護専門看護師）

【第6回】 令和5年3月7日：参加者数 103名

テーマ「『死にたい』と話す喉頭がん患者への関わりについて考える」

事例提供者：村上真由美（富山赤十字病院 がん看護専門看護師）

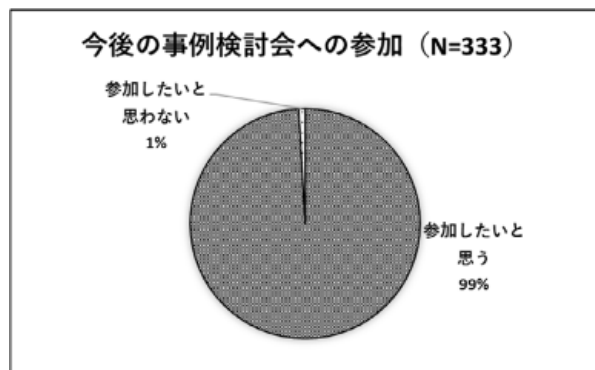
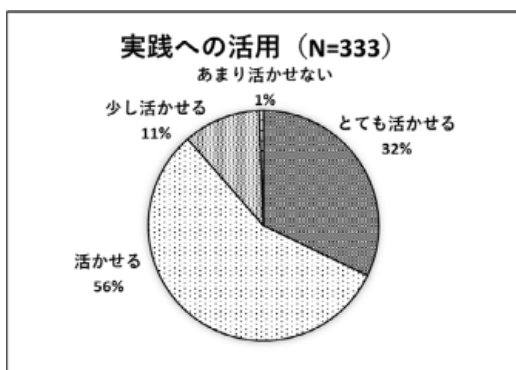
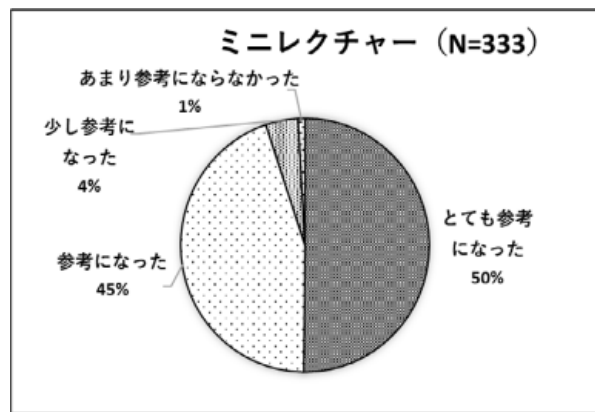
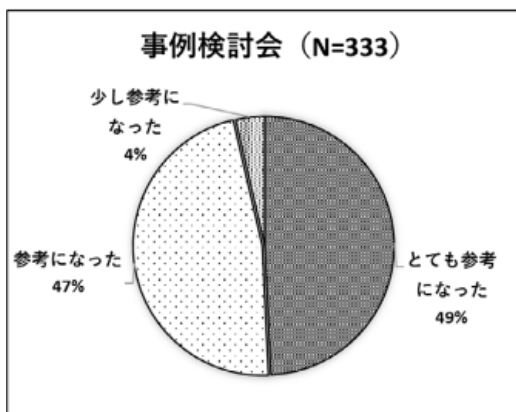
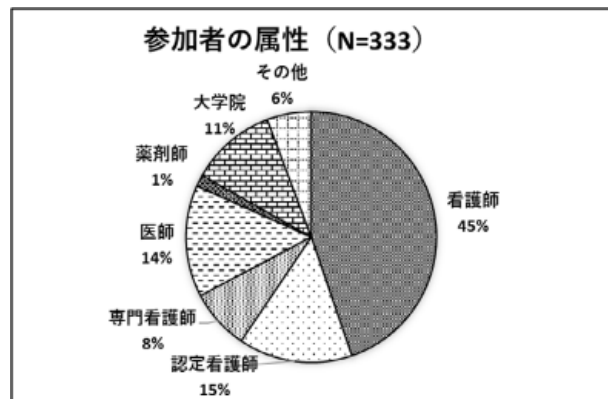
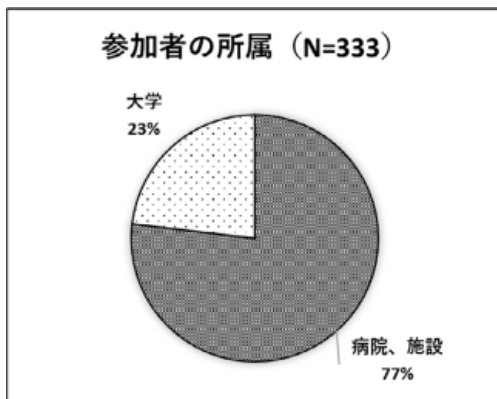
加藤真理子（富山赤十字訪問看護ステーション 訪問看護認定看護師）

ミニレクチャー「言葉の奥にある思いに気づくために」

講師：村上真由美（富山赤十字病院 がん看護専門看護師）

【成果】

参加者は大多数が看護師であったが、医師、薬剤師、放射線技師、臨床検査技師、言語聴覚士、公認心理士、介護支援専門員など、多職種の参加があった。さらに、全ての回のアンケート結果で、事例検討会、ミニレクチャーともに「とても参考になった」と「参考になった」「少し参考になった」と回答した人が、合わせて90%以上であった。今後も事例検討会に参加したいと希望する者は、全ての回で95%を超えていた。



【参加者からの感想】

- ・事例と一緒に追体験することや、意見交換をすることで深まることが沢山あり、こうして広くできることはとても良い機会だと思います。
- ・がん患者の診療に関してはどうしても話題がシリアスな方にむかいがちだと思いますが、そんな中多職種で意見を出し合って、前向きに治療、緩和について話し合っていけるのは素晴らしいと思いました。
- ・多職種でどう関わっていくか話し合うこと、スクリーニングシートなどのツールを用いて患者の思いを引き出し整理することがとてもよかったのだなと思いました。
- ・訪問リハビリで関わらせていただく中でも悩む部分であったので、多職種の方の意見や考え方を知ることができて良かったです。

4. 評価と今後の課題

毎回 90 名程度、もしくはそれ以上の参加があり、アンケート結果からも高評価を得ている。がん患者に携わる医療者のための、困難事例の解決や新しい知見の提供に、本事例検討会が役立っているものと評価する。また、オンライン開催としたことで、場所を選ばずに参加できることも、参加者数の確保の一因となったものとする。

今後の課題は、多職種からの事例提供が挙げられる。現在はほとんどの事例提供者が看護師であるため、がん看護専門看護師を調整役とし、多職種から事例提供してもらえるように促していく。

1-2-5 クリティカルケア看護師のための事例検討会

企画担当：大西 陽子 / 成人看護学 講師

1. 事業の目的

本事例検討会は、クリティカルケア領域における対応困難な事例の共有とディスカッションを通して、対応を困難にしている要因・原因を探り、看護の方向性を見出すことにある。加えて、各施設の看護実践に関する情報交換の場とする。

2. 実施状況

【開催日時および参加状況】

第1回：2022年10月8日（土）10:00～12:00 オンライン（Zoom）開催 参加者 4名
第2回：2023年2月18日（土）10:00～12:00 オンライン（Zoom）開催 参加者 7名
運営協力者 紺家 千津子（石川県立看護大学 成人看護学 教授）
松本 勝（石川県立看護大学 成人看護学 准教授）
大橋 史弥（石川県立看護大学 成人看護学 助教）

3. 実施内容

本事例検討会は、新型コロナウイルス感染症対策としてオンラインシステムを活用し開催した。講師に急性・重症患者看護専門看護師である寺井 彩氏（厚生連高岡病院）を招き、対象は北陸3県の医療施設に所属するクリティカルケア看護に従事する看護師とした。

第1回目は『クリティカルケア領域におけるEnd of Life Care』をテーマとし、集中治療室において積極的治療の甲斐なく終末期ケアに移行した患者家族へのケアについて事例検討および自施設における取り組みの共有と意見交換を行った。

第2回は『No More 自由泥棒 クリティカルケア領域における「脱」抑制』をテーマとし、臨床現場における身体拘束を減らす難しさ、スタッフ間での意識改革、安全と倫理の狭間でのジレンマなどについて、自施設での悩みや取り組みについて共有し意見交換を行った。

4. 評価と今後の課題

参加者を対象とした事後アンケートより、第1回、第2回ともに事例検討会の所要時間や内容は概ね満足であったとの回答が得られた。また、他施設における現状や取り組みを情報共有することでスタッフへの働きかけや風土づくり等、自施設での取り組みに活かしていけそうという声が聞かれた。加えて、今後も事例検討会を継続し、クリティカルケア領域におけるリハビリテーションや教育等について取り上げて欲しいという要望が聞かれた。

本事例検討会は少人数制での開催により活発な意見交換がなされ、参加者からも好評を得て終了した。今後も開催する際には活発な意見交換の場となるよう、参加者の増加に伴いグループワークを取り入れるなど検討会の運営方法を工夫していく必要がある。

1-2-6 CNS関係者による看護事例検討会

企画担当：今方 裕子 / 成人看護学 助教

1. 事業の目的

専門看護師(CNS)は、複雑で解決困難な看護問題を持つ患者、家族及び集団に対して水準の高い看護ケアを効率よく提供する役割がある。北陸3県で活動するCNSがその役割を発揮するため日々の実践を振り返る機会は限られており、自ら課題解決していく力を養うこと、悩みを共有し看護実践に生かすための機会が必要である。本事業は、事例検討およびグループワークを通して日々の実践を振り返り、課題解決していく力を養うことと、今後がん専門看護師の資格試験受験を予定している者の事例記載検討を目的として開催した。

2. 実施状況

【開催日時および参加状況】

第1回：2022年9月13日（火）17:30～18:00 オンライン（Zoom）参加者 18名

事例提供者：印幡 香（富山県赤十字病院看護部 皮膚排泄ケア認定看護師 がん看護専門看護師候補生）

第2回：2023年2月28日（火）17:30～18:30 オンライン（Zoom）参加者 28名

事例提供者：中島佳子（富山西総合病院 がん看護専門看護師）

コメンテーター：清水奈緒美（湘南医療大学 准教授 がん看護専門看護師）

3. 実施内容

第1回の事例は、「終末期がん患者の在宅療養移行支援をめぐる医療者の中での思いの違い」のテーマで、今年度CNS認定審査を受験予定の1名から、倫理調整について事例提供があった。参加者は、がん看護専門看護師、老年看護専門看護師、大学院生など合計18名の参加があった。治療方針や生き方に関する患者、家族、医療者の意見の相違に対して退院支援を行う上で苦渋した内容について活発なディスカッションが行われた。事例のテーマは倫理調整が必要な事例であったが、実践あるいはコンサルテーションの役割視点からの意見交換もなされ、事例記載に必要な視点を学ぶ様子がみられた。

第2回の事例は、コンサルテーションに関するテーマで、がん看護専門看護師の認定を受けて1年目のCNSより事例提供があった。参加者は、がん看護専門看護師、老年看護専門看護師、大学院生、CNS教育に関わる教員など合計28名の参加があった。コンサルテーションを行う上での大切なCNSとしての視点を共有し、CNS認定1年目などCNSとしての経験が浅い場合の相談の受け方などについて活発な意見交換がなされ、実りある事例検討会となった。



4. 評価と今後の課題

事例提供者が実践した方略について意見交換がなされ、立場や施設を超えて活発なディスカッションが行われた。CNS 受験候補生に向けて、CNS から受験に向けてのアドバイス、専門性や経験に基づいた的確な助言によって有意義な会となった。2 回目は実践経験、教育経験豊富なアドバイザーをお迎えし、現在臨床で活躍する CNS からの事例提供によるより高度で複雑な看護問題に直面する患者・家族へ CNS の役割に関する検討が行えた。今後も、北陸 3 県で活動する CNS がそれぞれの役割を発揮するため日々の実践を振り返る機会や、自ら課題解決していく力を養うための機会が必要である。

1-2-7 褥瘡管理スキルアップ研修会

企画担当：紺家 千津子 / 成人看護学 教授

1. 事業の目的

本事業は、医療関連機器圧迫創傷に関する予防・管理方法について事例を通して知識を深め、参加者各々が得た学びと気づきを実践に活用できることを目的とした。

2. 実施状況

メインテーマ：「医療関連機器圧迫創傷について学び、ケアに活かす」

開催形式：オンラインセミナー（Zoomによるライブ配信）

- 第1回 令和4年7月30日（土） 13：30～15：30

参加者数：74名（看護師）

プログラム：司会：大橋史弥（石川県立看護大学 成人看護学 助教）

- ・第1部 「医療関連機器圧迫創傷のすべて」

講師 木下 幸子（中部学院大学 看護リハビリテーション学部 看護学科 教授）

- ・第2部 「医療関連機器圧迫創傷の評価方法」

講師 紺家 千津子（石川県立看護大学 看護学部 成人看護学 教授）

- 第2回 令和4年11月27日（日） 14：00～15：00

参加者数：31名（看護師）

- ・「皮膚・排泄ケア認定看護師による医療関連機器圧迫創傷を含むケア相談」

講師 遠藤 瑞穂（公立松任石川中央病院 皮膚・排泄ケア認定看護師）

紺家 千津子（石川県立看護大学 看護学部 成人看護学 教授）

3. 実施内容

オンライン開催による研修への参加のしやすさ、講演内容の理解度向上に向け、参加者に対して事前に Zoom の使い方マニュアルや講義資料の郵送を行った。

第1回では、医療関連機器圧迫創傷（以下、MDRPU とする）の概念や医療機器別の予防ケアについて、事例を交えた講演がなされた。その後、MDRPU の評価方法に関して写真を供覧しながら、詳細な採点のポイントについて講演がなされた。参加者は MDRPU が発生した事例（写真）を供覧しながら実際に採点を行い、知識を深めた。講義後には、MDRPU に関するケア相談を実施した。

第2回では、臨床現場における医療機器別のケア方法や、多職種との連携等について参加者から相談があり、皮膚・排泄ケア認定看護師によるアドバイスが行われた。

参加者からは、「日々の実践に活かしていきたい」、「具体的な事例を見ることで分かりやすかった」、「今回の学びを自施設での勉強会に役立てたい」等のコメントが寄せられた。

昨年度に引き続き、オンラインによる研修会であったが、配信トラブルなく終了した。

4. 評価と今後の課題

今年度より参加費として500円を徴収したが、参加者数は前年通りであったため本企画に関する看護師のニーズの高さが伺えた。今後は褥瘡管理についてニーズの高い事項を調査しながら、開催の検討をしていく。

1-2-8 新人助産師のスキルアップ研修

企画担当：曾山 小織 / 助産看護学 講師

1. 事業の目的

新人助産師を対象にして卒後の体験を共有するとともに、妊産婦の死亡原因で多い産科異常出血時の基本的対応を身につけることを事業の目的とする。

2. 実施状況

開催日時：令和4年9月10日（土）10:00～12:00

開催方法：対面及びオンラインのハイブリッド方式

参加者数：助産師養成施設卒業者（卒後1年～3年目） 9名

本学助産看護学教員 6名

備考：研修内容を参加者の学習ニーズが高かった「胎児心拍陣痛図の読み取りと基本的対応」に変更して、シナリオ・シミュレーションによるチーム学習を実施した。

3. 実施内容

2部制で実施した。第1部は座談会を実施した。助産ケアで日頃困っていることを出し合い、どのようにケアを実践しているか話し合ったことで、異なるケア方法を知り、ケアを選択するときの幅が広がったのではないかと思う。また、「ふたご手帖」を紹介して、実際に使用している参加者から活用時の具体的な工夫を話してもらった。

第2部では、胎児心拍陣痛図のシナリオ・シミュレーションによるチーム学習を実施した。モニターを判読して、産婦への説明、医師への報告、薬剤の準備などの対応についてデブリーフィングを行った。臨床判断の正確さとスピードを見て同級生はお互いに成長を感じ、先輩の姿を見た後輩は近未来像が励みになったようであった。

4. 評価と今後の課題

開催時期について、卒後1年～3年目の異なる年数の助産師が参加したが、それぞれが丁度良いと回答していた。開催方法は対面、または対面とオンラインのハイブリッド方式、開催時間の長さは参加者の希望通り半日としたため評価は良かった。シミュレーションに対しては満足していたが、複数種類のシミュレーションを実施したかった、及びデブリーフィングの時間を長くしてほしいという意見が一部にみられた。今後学習したい内容は、胎児機能不全で出生した児の蘇生であった。新生児の蘇生は新生児蘇生法（NCPR）普及事業等で学習の機会があるため、新卒助産師が戸惑う内容を具体的に情報収集して今後の企画を考えたい。



1-2-9 看護に活かすポケットエコーを一つ一つわかりやすく

企画担当：木森 佳子 / 基礎看護学 准教授

1. 事業の目的

より安心な地域包括ケアシステム構築に向け、複合的な健康障害を持つ地域高齢者の症状マネジメント能力を向上させるため、ポケットエコーを活用した看護実践や教育プログラムの存在について看護職が知る機会とする。多職種の講演も含め、エコーの基礎教育を受けていない看護職を支える。

2. 実施状況

開催日時：令和4年9月3日（土）13:30～15:30

開催方法：オンライン（Zoom）

参加者数：52名（看護師、看護教員）

テーマ：スタートアップ！看護に活かすポケットエコーを一つ一つわかりやすく

講演内容：「新たな教育で排泄ケアに活かす」

講師：松本勝（石川県立看護大学 成人看護学 准教授）

「心不全患者に活かしたい」

講師：木間美津子（心臓血管センター金沢循環器病院 看護部長）

名村正伸（心臓血管センター金沢循環器病院 CEO）

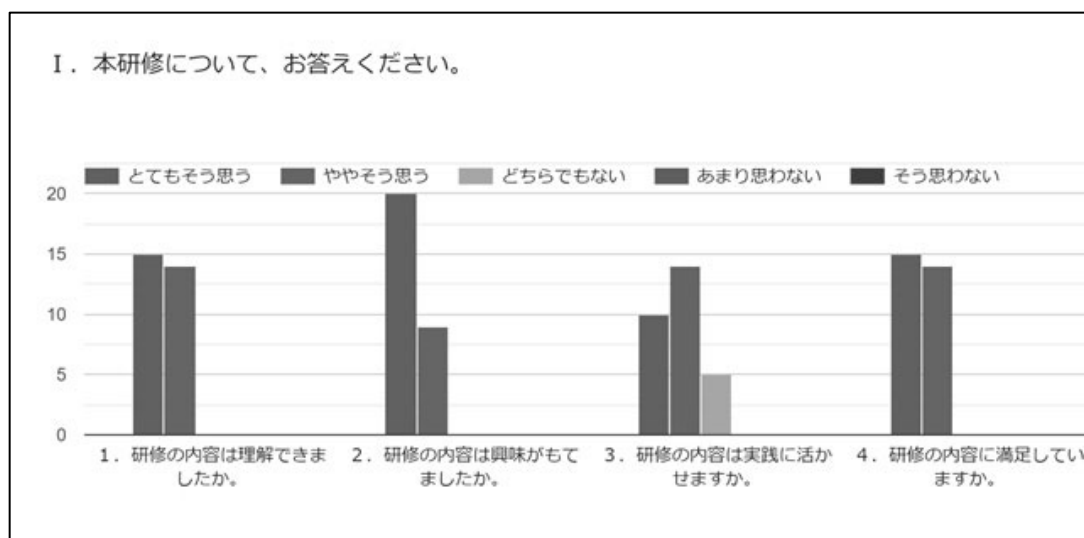
「在宅で過ごす、笑顔のために」

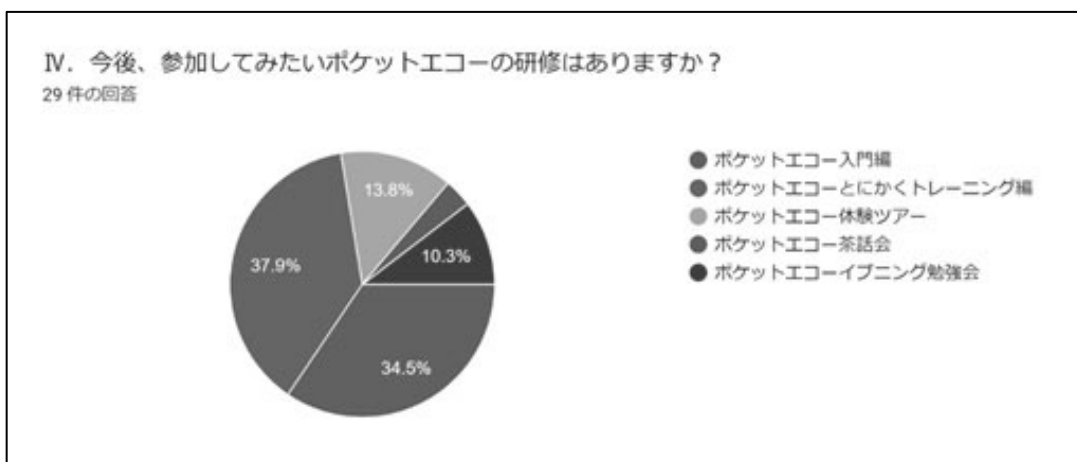
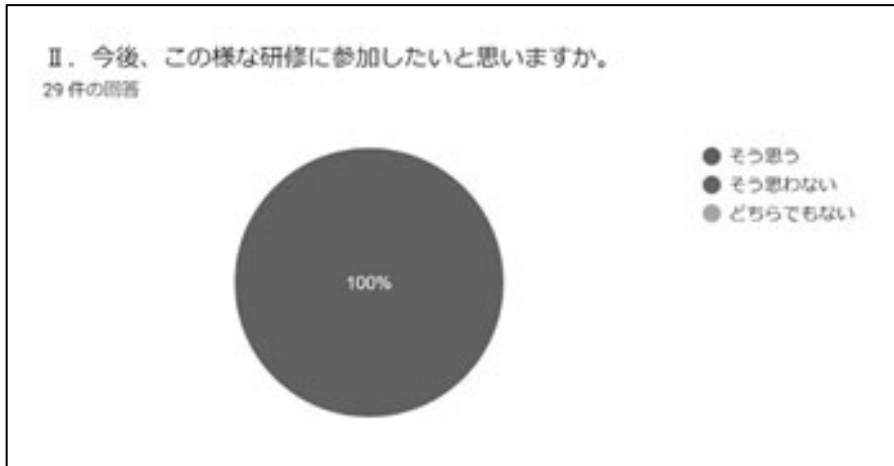
講師：野島浩基（エマオ訪問看護ステーション プライマリケア診療看護師）

進行：木森佳子（石川県立看護大学 基礎看護学 准教授）

3. 実施内容

アンケート結果では29名の回答があった。回答者全員が内容をほぼ理解、興味をもてた、満足を持ってたと回答した。だが、研修の内容を実践に活かそうか、という問いには、「活かそう」が24名、「どちらでもない」に5名が回答した。今後、このような研修に参加したいかは全員が「そう思う」と回答し、参加してみたい研修は、「トレーニング」が最も多かった。自由記載では、理解やモチベーションの向上の記載に加え、ポケットエコーの導入には職場、管理者、事務局の理解が障壁になっていることが読み取れた。





4. 評価と今後の課題

ポケットエコーの看護の活用が、現場だけでなく教育にも組み込まれたこともあり、そもそも関心のある研修内容で実践例や教育プログラムの紹介があったことでモチベーションも高まったと考えられる。だが、実践への導入には教育プログラムに参加して看護職がスキルアップするだけでなく、エコーを実際に購入しトレーニングしなければならない。それには管理、運営側、職場全体の理解が障壁になっていると読み取れた。

1-2-10 臨床で行うリンパ浮腫のケア

企画担当：牧野 智恵 / 成人看護学 教授

1. 事業の目的

リンパ浮腫は、がん治療によるリンパ節郭清や、放射線治療、化学療法といったがん治療によって発生する。臨床で行うリンパ浮腫ケア基礎編は、リンパ浮腫に関する知識をもち、教育やケアに携われるように、リンパ浮腫の予防的介入から終末期まで様々な段階でのリンパ浮腫のケアを理解する目的で開催している。アドバンス編は、基礎編を修了した方々を対象に、基礎編で学んだ知識と技術を活用し臨床で実践していただくためのセミナーである。事例検討・ロールプレイと実技を実践する参加型の研修である。

2. 実施状況

今年度は、がん看護専門看護師でリンパ浮腫セラピストとして活躍している高地弥里さんと、時山麻美さんを講師としてお招きし、対面のみの参加者を対象にセミナーを開催した。基本的な知識から実践につながる内容、演習まで学ぶ機会とした。

【基礎編】

開催日時：令和4年9月1日（木） 9:30～16:00

開催場所：石川県立看護大学 1階 中講義室1

参加者数：4名

講師：高地弥里（石川県済生会金沢病院 がん看護専門看護師／
日本医療リンパドレナージ 中級セラピスト）

時山麻美（訪問看護ナースソフィアにいかわ がん看護専門看護師／
日本医療リンパドレナージ 中級セラピスト）

【アドバンス編】

開催日時：令和4年9月22日（土） 9:00～13:00

開催場所：石川県立看護大学 2階 成人・老年看護学実習室

参加者数：4名

講師：高地弥里（石川県済生会金沢病院 がん看護専門看護師／
日本医療リンパドレナージ 中級セラピスト）

時山麻美（訪問看護ナースソフィアにいかわ がん看護専門看護師／
日本医療リンパドレナージ 中級セラピスト）

3. 実施内容及び成果

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、十分な感染対策の上で実施した。当日は病院看護師、クリニックで勤務する看護師に参加いただいた。

基礎編では、基本的な事柄を分かりやすく丁寧に解説いただき、動画を用いたセルフリンパドレナージのデモンストレーションをしていただいた。アドバンス編では、リンパ浮腫を発症した事例のグループワークや、リンパ浮腫発症した患者のロールプレイを行った。

参加者同士のロールプレイの後、講師がロールプレイの模範例を示した後、終末期患者への下肢・腹水マッサージの実際について演習を行った。

4. 評価と今後の課題

これまで北陸がんプロで実施していた事業を今年度は、地域ケア事業として実施し、予算の関係で

対面での参加が可能な者のみを対象とした。そのため、参加者が少なかった。

しかし、基礎編やアドバンス編では、先生方の講義や手技に多くを学ぼうと熱いまなざしが注がれ、参加者からより実践的な質問が上がり、日々の臨床におけるニーズの高さが伺えた。アドバンス編の演習では、患者役と看護師役の両者を体験し、患者としてマッサージを受ける感覚や適切な圧を肌で感じ取りながら熱心に学んでおり、具体的な臨床でのケア方法が習得できていた。

次年度も本事業を継続して実施していきたい。



1-2-11 看護研究に活かせる現象学を楽しく学ぼう

企画担当：牧野 智恵 / 成人看護学 教授

1. 事業の目的

20年程前から看護学分野での現象学を用いた研究が盛んに行われている。しかし、現象学という学問が難解であるため、看護学の分野では正しくその方法論を用いた研究が少ない。そこで、これまで現象学的方法論を用いた研究実施経験のある牧野智恵と、マルティン・ハイデッカーの専門家である高井ゆとり（群馬大学 情報学部 准教授）が、現象学方法論を用いた研究（原著）を参加者とともに読み進め、看護研究に活かせる現象学的研究について意見交換し、理解を深めることを目的とした。

2. 実施状況

県内外から看護学分野での現象学を用いた研究に関心のある大学教員、大学院生、看護師が参加した。

【開催日時および参加状況】

第1回：令和4年8月23日（火）18:00～20:00	オンライン（Zoom）開催	参加者 17名
第2回：令和4年9月20日（火）18:00～20:00	ハイブリッド開催	参加者 19名
第3回：令和4年11月8日（火）18:00～20:00	オンライン（Zoom）開催	参加者 17名

3. 実施内容

第1回は「『がんの再発を生きるということ』川端愛著，日本がん看護学会誌，Vol 33，77-85，2019年」を読み合わせた。参加者たちは論文を読んでわからない現象学の用語、わからない医学用語、結果や考察で疑問に思ったことなどについて自由に話し合った。

第2回は、「『うつ病を抱えながら老いを生きる高齢者の体験』田中浩二著，日本看護科学会誌，Vol. 32 (3)，53-62，2012年」を読み、現象学研究におけるリッチなデータをとる上での面談の難しさ、分析方法などについて意見交換した。

第3回は、「『筋ジストロフィー病棟で働く看護師の経験 —患者の入院生活を成り立たせている看護師の関わりに注目して—』石田 絵美子著，保健医療社会学論集 Vol127(1)，94-104，2016年）を読み、各現象学者の特徴や他者の経験を記述する特徴について考察した。



第2回：2022年9月20日（火）18時～20時 対面+リモート参加のハイブリッド開催



第3回：2022年11月8日（火）18時～20時 リモート開催

4. 評価と今後の課題

これまで発表された看護研究（原著）を手がかりに、現在看護界で行われている現象学を用いた研究について、方法論は理解できるか、哲学用語は理解できるか、本当にこの方法論を使う必要があったのかなどに焦点を当て、参加者と意見交換を行った。各哲学者の哲学的基盤や人間の捉え方、現象学独特の用語については、高井先生からわかりやすく説明していただいた。

また今回は、リモート参加を取り入れたため、大学教員や院生だけではなく県内外の臨床で活躍する看護職（看護師、専門看護師、助産師）も参加いただき、論文の内容を臨床の事例や参加者の体験を落とし込みながら理解を深めていた。

参加者は自由に疑問点を投げかけ、現象学的方法論の理解を深め、楽しく学ぶ機会となっていた。参加者からの要望も高く、来年以降もリモートを取り入れつつ、継続して実施していきたい。

1-3 相談サービス事業

1-3-1 各種研修会等への講師派遣事業

看護・福祉・介護専門職の質の向上、県民の健康・福祉の向上、行政課題の解決に資することを目的に、看護研究の支援や、研修等へ本学専任教員が出向いた。

分野別派遣件数

番号	1	2	3	4	5	6	計
種類	病院等	職能団体 (看護協会等)	行政	学校・教育機関	福祉・高齢者関係 の任意団体	その他	
回数	9	0	5	1	1	0	16

No.	派遣講師 (職名 氏名)	派遣日程	派遣場所	内容	主催者	種類 番号	回数
1	講師 田村 幸恵	R4.4月～R5.3月 計4回	JCHO 金沢病院	看護研究指導	JCHO 金沢病院	1	4
2	講師 大江 真吾	R4.5.23、5.24、5.25 8.9、10.3 17:30～20:00	金沢医療センター	看護研究指導	金沢医療センター	1	5
3	准教授 寺井 梨恵子	R4.6月～R5.3月 計3回	公立宇出津総合 病院	看護研究指導	公立宇出津総合 病院	1	3
4	講師 大西 陽子	R4.7月・10月・12月・ R5.3月 計4回	珠洲市総合病院	看護研究指導	珠洲市総合病院	1	4
5	助教 額 奈々	R4.7.15、8.9、9.7、 9.14、11.7 計5回	河北中央病院	看護研究指導	河北中央病院	1	5
6	助教 瀬戸 清華	R4.8月～R5.3月 計3回	町立宝達志水 病院	看護研究指導	町立宝達志水病 院	1	3
7	准教授 金谷 雅代	R4.9.4 10:00～12:00	イオンモールかほく	救急フェア啓発活動	かほく市消防本部	3	1
8	講師 大江 真吾	R4.10.4、10.5、10.6 17:30～20:00	金沢医療センター	看護研究指導	金沢医療センター	1	3
9	准教授 金子 紀子	R4.10.6 13:00～15:00	金沢伏見高校	第3回看護セミナー 講演会	金沢伏見高校	4	1
10	講師 大江 真吾	R4.10.7 10:30～11:10	イオンモールかほく	こころの健康講座	かほく市健康福祉 課	3	1
11	准教授 中道 淳子	R4.10.30 13:30～14:30	白山市福祉ふれ あいセンター	ボランティアのつど い講演会	白山市ボランティ ア連絡協議会	5	1
12	教授 塚田 久恵	R4.11.22 9:30～16:00 R4.11.29 13:00～16:00	石川県庁	新任保健師等研修会	石川県健康推進課	3	2
13	講師 大江 真吾	R4.12.29 13:30～14:30	金沢医療センター	看護教育研究	金沢医療センター	1	1
14	教授 牧野 智恵	R5.1.28 9:00～12:30	石川県立中央病院	看護管理者研修	石川県立中央病院	1	1
15	教授 米澤 洋美	R5.3.3 13:30～15:40	町民センター アステラス	介護予防サポーター フォローアップ研修	宝達志水町	3	1
16	教授 塚田 久恵	R5.2.28 10:00～12:15	石川県庁	新任保健師研修会 フォローアップ研修	石川県健康推進課	3	1

1-3-2 病院への事例・看護活動・研究等の指導助言実施状況（再掲）

地区/県	派遣病院名	指導内容	講師名	回数
金沢	金沢医療センター	看護研究指導・研究	講師 大江 真吾	9
	JCHO 金沢病院	看護研究指導	講師 田村 幸恵	4
	石川県立中央病院	看護管理者研修	教授 牧野 智恵	1
	河北中央病院	看護研究指導	助教 額 奈々	5
能登	珠洲市総合病院	看護研究指導	講師 大西 陽子	4
	公立宇出津総合病院	看護研究指導	准教授 寺井 梨恵子	3
	町立宝達志水病院	看護研究指導	助教 瀬戸 清華	3

2-1 地域連携・貢献事業

2-1-1 終末期看護実践の悩みを共に語り心も体もリフレッシュ

企画担当：牧野 智恵 / 成人看護学 教授

1. 事業の目的

オルゴール療法には「治療効果」として、「想像力の開発」「心理的効果」があるといわれている。看護師は、受け持ち患者の死と向き合う体験をしても、ゆっくり自分の心を癒せる場がない。そういった体験者同士が、オルゴール療法や自らの体験を語る場の中で、悲嘆を乗り越え、今後の看護実践を意味あるものできると期待される。

2. 実施状況

開催日時・場所：

- 第1回：令和4年7月9日(土) 14:40～16:00 石川県立看護大学地域ケア研修室
参加者 9名
- 第2回：令和4年8月20日(土)10:30～14:30 ハーブの里・響きの森（ミントレイノ）
参加者 6名
- 第3回：令和4年9月18日(土)10:30～14:30 ハーブの里・響きの森（ミントレイノ）
参加者 15名

※上記参加者のほか、学部生2名も参加した

3. 実施内容

第1回は、終末期看護実践でモヤモヤを抱く看護師9名が参加し、本学地域ケア総合センターで対面での開催をした。参加者はこれまでの終末期看護実践を通しての思いや悩みについて自由に語り合った。

第2回、第3回は白山市のミントレイノにて、2班に分かれ、①アロマスプレーづくり、②オルゴール療法といったリフレッシュ体験を行った。その後、第1回の対話を踏まえた終末期実践における気持ちの変化や各施設でのグリーンケアの課題や今後のケアについて語り合った。

いずれも新型コロナウイルス感染拡大防止のため、3密を避け十分な感染対策の上で実施した。

【プログラム（ミントレイノ）】

- 10：30～11：30 ① アロマスプレーづくり、庭園の散策
- 11：30～12：30 ② オルゴールセラピーの体験
- ※3密防止のため①②を交代で実施
- 12：30～13：30 休憩
- 13：30～14：30 対話
- 14：30～ アンケート、解散

4. 評価と今後の課題

第1回では参加者の自己紹介と、これまでの終末期看護実践の中で、まだ心に残っている感情や出来事について自由に語りグリーンケアの必要性について語り合った。参加者は長年病院ではたらし終末期看護に多く携わっている看護師たちで、コロナ禍での終末期看護の悩みや、終末期看護の際の医療チームの協働の難しさ、他者になかなか終末期の看取り後の感情を伝えられないことで生じるストレスなど様々な悩みを参加者で共有した。中堅以上になると個人の看護実践能

力が高まるがゆえに組織の在り方に疑問を抱き、個人の努力ではどうしようもできない問題（患者の急変、緊急入院など）に直面し、苦悩していることが窺えた。

第2回、第3回では他の参加者も同様の悩みを抱えながら日々の看護に取り組んでいることを共有し、悩みを抱えたままでもいいのだという感覚や、これからも自身の経験を積み重ね看護実践に活かしたいという発言が生じていった。またアンケートの結果からも、第1回終了時の参加者は「曇った気持ち」であったが、第3回終了時には「晴れ晴れした気持ち」に変化していたことがわかった。本企画を通してオルゴールの響きとアロマの香りに癒されながら終末期看護の内容を語るというグリーフワークは、終末期看護実践の悩みを癒す機会となっていた。

グリーフワークは施設内では、デスカンファの中で実施している場合が多い。しかし、院内では、各看護師の実践の評価になる場合が多いことが参加者の語りから伺えた。今回、地域や所属施設が異なる看護師同士が参加したからこそ、組織に対する思いも自由に表出できたようである。今後は参加者の語りの内容の分析を通して、終末期実践を抱える看護師が望むグリーフケアの在り方や、効果的なリフレッシュ企画についても検討していきたい。

アロマスプレー作り体験



オルゴール療法を体験しストレス解消！



対話タイムで終末期看護の悩みを共有しました

2-1-2 ひとりで悩まないで！乳がんサバイバー同士で語り合おう

企画担当：瀧澤 理穂 / 成人看護学 助教

1. 事業の目的

乳がんは子育て世代の罹患率が高く、症状や治療における身体的苦痛に加え、子育て、家事、仕事と関する様々な悩みを抱えている。乳がんサバイバー同士が療養や生活上の悩みを話し、情報交換することは不安の軽減や闘病への意欲につながるといわれているが、新型コロナウイルスの影響によりサバイバー同士の交流の機会が減り、自らの悩みを表出する場や情報を得る機会が失われている。そこで今回、乳がんサバイバーが自身の思いや悩みを語り合う場と乳がんに関する専門的知識提供（勉強会）の機会を提供することで、不安の軽減や闘病意欲の向上を目的に実施した。

2. 実施状況

本企画は実施責任者（瀧澤）の他、成人看護学領域教授（牧野智恵 ※現名誉教授）と石川県の乳がん患者会（ひまわり会）の協力を得て実施した。また北陸3県から乳がん看護の専門家を講師に招いた。本企画は、会場参加とオンライン参加のハイブリット形式を予定していたが、参加者の希望および新型コロナウイルスの感染状況を踏まえて完全オンライン開催となった。

【開催日時および参加状況】

第1回：令和4年5月28日（土）	13:00～15:00	参加人数：10名
第2回：令和4年8月6日（土）	13:00～15:00	参加人数：7名
第3回：令和4年11月5日（土）	13:00～15:00	参加人数：5名

3. 実施内容

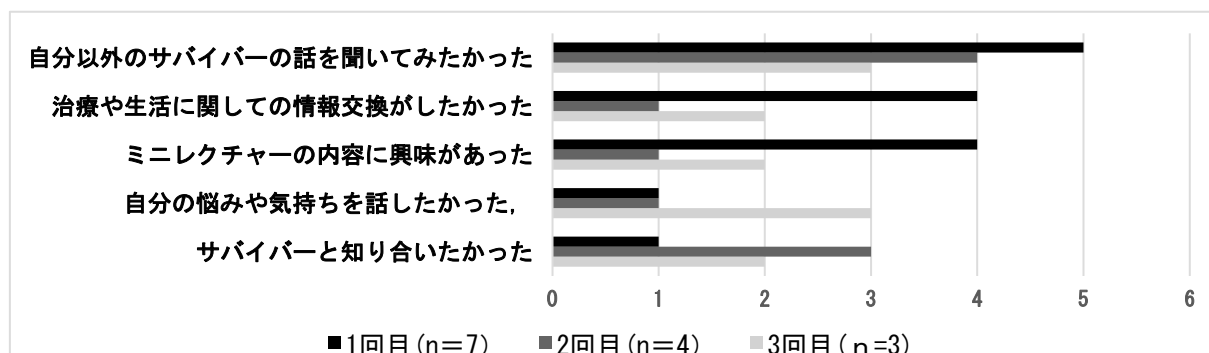
第1回は自己紹介のあと、福井県立病院 乳がん看護認定看護師/がん看護専門看護師の中野妃佐恵さんからリンパ浮腫に関するミニレクチャーをして頂き、日常生活におけるリンパ浮腫副作用対策について質疑応答を行った。また、家族からのサポート不足や主治医と治療方針の話し合う難しさなどについての悩みが語られた。

第2回は、富山県済生会高岡病院 乳がん看護認定看護師の山田真由美さんから「脱毛の予防と対策」というテーマでミニレクチャーをして頂いた。その他、SNSとの付き合い方、食生活の工夫、病院の選び方などについて自由に語り合った。

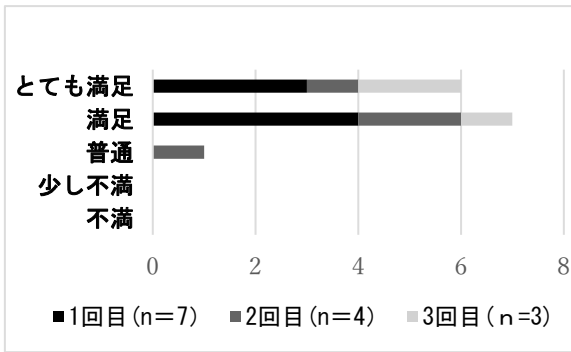
第3回は、金沢医科大学病院 乳がん看護認定看護師の久野真知子さんから「子どもへの伝え方・関わり方」というテーマでミニレクチャーをして頂いた。

4. アンケートの結果

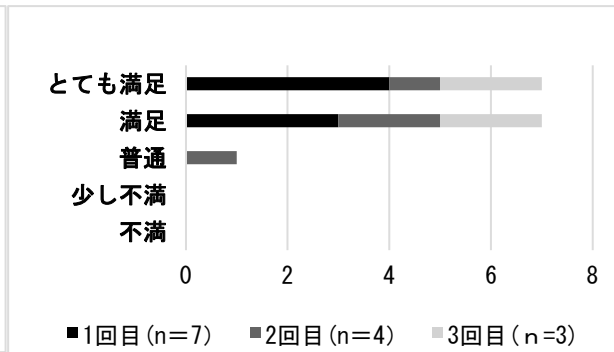
1) 参加の理由



2) 参加者同士の語り合いについての満足度



3) ミニレクチャーの内容についての満足度



4) 自由記載の内容

①1回目

参加者からは「長く付き合っていくリンパ浮腫との向き合い方がわかって良かった。」「自分で少しでもおかしいと思ったら相談してみる事が大事だと感じた。」などの感想を頂きました。

②2回目

参加者からは「脱毛の仕組みから、身近な脱毛対策、最新の脱毛対策など色んな情報があって良かった。」「同じ病気の先輩や専門知識のある看護師さんにちょっと気になっていたことを相談できて安心した。」などの感想を頂いた。

③3回目

参加者からは「子どもにいつ、どこまで病気について話すかは正解がないから難しい。でもみんなの経験を聞いたり、講師の先生のお話を聞いて参考になった。」などの感想を頂いた。

4. 評価と今後の課題

今回の参加者の中には、通院している病院にがんサロンや患者会がなく同じ病気を抱える患者との交流を求めている方、化学療法中で免疫が低下しているため対面のがんサロンに参加する不安があった方、ミニレクチャーの内容に関心があり看護師への相談を希望されていた方などがいた。全面オンライン開催となったことで、石川、福井、富山在住の参加者同士、県の垣根を超えた語り合いや情報交換を行うことができ、同病者同士が支え合う場としての本企画を開催とした意義があったと考えられる。

アンケートの結果からも、同病者同士、お互いの経験や思いを伝えあう場を通して、「悩みは一人で抱えずに仲間に話してみる」ということの大切さを感じられた。またひとりひとりの悩みを講師の先生に直接相談できることで、治療や生活に関する不安軽減につながる有意義な企画となった。

今後も北陸の乳がんサバイバーの方同士の交流の場や、医療者、行政をつなぐ橋渡しができるように取り組んでいきたい。

ひとりで悩まないで！
乳がんサバイバー 同士で語り合おう

新型コロナウイルスにより密着との交流の機会が減っています。本企画に参加し、乳がんサバイバーの仲間と向き合いませんか？
詳しくはミニレクチャーを随時開催しています！に身体を動かしています。

第1回 5月28日 13:00~15:00 ミニレクチャー (20分)
講師：福井県立病院 がん看護科 中野 紀佐恵さん
【リンパ浮腫について】

第2回 8月6日 13:00~15:00 ミニレクチャー (20分)
講師：富山県立中央病院 乳がん看護科 山田 真由美さん
【脱毛の予防と対策】

第3回 11月5日 13:00~15:00 ミニレクチャー (20分)
講師：金沢医科大学 乳がん看護科 久野 真知子さん
【子どもへの伝え方と語り方】

対象 乳がんサバイバーの方 参加費 無料
場所 オンライン(ZOOM) ZOOMか はじめての方も詳しく！
※会場参加を希望される場合はご連絡ください。
※PCR検査の結果もご確認ください。

企画責任者：石川県立看護大学 成人看護学講座 滝澤 瑠璃
電話：076-281-8300 (代表) 8362 (直通)
E-mail: ishikawa@nu.ac.jp
住所：〒920-1210 石川県がはく市学園内1-1

ひとりで悩まないで！
乳がんサバイバー 同士で語り合おう

QRコードまたはE-mailより申し込み下さい

E-mail→takizawa@ishikawa-nu.ac.jp

※石川県立看護大学のやり方もお申込み可能です。
トップページ→臨床ケア総合センター事務局の窓口 令和4年度事業第一頁

QRコードまたはHPの申し込みフォームにご回答ください
E-mailの場合は下記の必要事項を記載し、送信してください

【必要事項】
①氏名
②郵便番号 住所
③連絡先 (メールアドレス)
※必ず登録が可能な連絡先をご記入ください。
※注：ご家族の方の連絡先を付けて頂くには参加できません。
④参加日時 (1回目、2回目、3回目)

1回目：5月24日(火)
2回目：8月2日(火)
3回目：11月1日(火)

《申し込み締め切り》

主催：石川県立看護大学 地域ケア総合センター
電話：076-281-8300 (代表) 8362 (直通)
企画責任者：石川県立看護大学 滝澤 瑠璃

2-1-3 パーキンソン病いきいきリハビリ教室

企画担当：岩佐 和夫 / 健康科学講座 教授

1. 事業の目的

パーキンソン病ではリハビリテーションが病状の進行予防に有用であり、同病の患者同士の情報交換も病状把握や治療の自己決定において重要である。本事業においては、リハビリテーションを楽しく体験してもらい、リハビリテーションへの参加意識を向上させること、また、パーキンソン病患者に対し、お互いに情報を共有する場や疾患に関する情報発信の場を提供することを目的とした。

2. 実施状況

令和4年度のパーキンソン病いきいきリハビリ教室については、夏と秋の2回開催することができた。夏の教室では、便秘をテーマに講演を行い、リハビリについても便通を改善させるための体操を中心に紹介した。秋の教室は、金沢医療センターと共同開催をおこなった。これまで開催したリハビリ教室のアンケートで要望のあった金沢市内での開催を行うため、金沢文化ホールを会場とし開催した。パーキンソン病に特化したLSVTのリハビリについての講演と運動指導を行い、リハビリの重要性を理解してもらった機会となった。また、金沢医療センターで行っているKMCパーキンソン病体操研究会の運動を紹介した。コロナ禍での開催であり、人数制限、来場者の体調確認を行い、換気や消毒、3密をさけるためのスペースを確保して教室を開催した。

3. 実施内容

(1) 「第2回 パーキンソン病いきいきリハビリ教室」

開催場所：七塚健康福祉センター（多目的ホール）

開催日時：令和4年7月18日（月・祝） 10:00～12:00

講演：「はればれとおおらかに「気持ちよく出す」からはじめる健康づくり」

榊原千秋 [うんこ文化センターおまかせうんちッチ代表
コミュニティスペース「88Labo」「ややのいえ」「とんとんひろば」]

リハビリ教室：便秘改善に関する運動（副交感神経を活発に）

相談会：個別相談

参加者人数：19名 パーキンソン病患者および家族 11名

看護師 3名

PT・OT 2名

医師 3名

スタッフ：7名（2名のボランティア学生を含む）

うんこ文化センターおまかせうんちッチ代表の榊原千秋先生による便通を良くするための講演があり、自身の経験や在宅医療を行う際の具体的なアドバイスを取り入れて、非常にわかりやすく、かつ、理論的な講演を行った。医療関係者の参加も8名あり、臨床の現場においても参考になる講演であった。

講演後は、排便を良くするために副交感神経の活動をあげるための運動の指導があった。足趾の運動から始まり、足首、膝、股関節、腸骨からお腹のマッサージ、胸を張る運動、呼吸法、あごや顔のマッサージなどの紹介と運動指導があった。運動を行うことでリラックスができ、お腹の調子もよくなったと感じられる運動であった。

榊原先生は、講演の始まる前や休憩時間にパーキンソン病患者さんのところに自ら出向き、排便のことや在宅で困っていることがないかなど丁寧にお話を聞き、個々の相談にのっていた。

(2) 「第3回パーキンソン病いきいきリハビリ教室」 &
「第19回パーキンソン病体操教室」

実施日時：令和4年11月6日(日) 10:00～12:00

開催場所：金沢市文化ホール(大集会室)

講演：「パーキンソン病の運動療法LSVT®BIG」

柳 明弘 (PDハウス小坂 リハスタッフ)

田川壮也 (")

リハビリ教室：KMCとPDハウスによる合同リハビリ教室

懇親会・相談会：LSVT*資格のあるリハビリスタッフによる質疑応答

脳神経内科専門医による質疑応答

参加者人数：約15名(全参加者27名)

スタッフ：石川県立看護大学スタッフ 5名

KMCスタッフ 5名

講師 2名

※LSVT：パーキンソン病に特化したリハビリテーションを行うための資格

金沢文化センターにて「第19回パーキンソン病体操教室」(金沢医療センター)と「第3回パーキンソン病いきいきリハビリ教室」(石川県立看護大学地域ケアセンター)を合同で開催した。看護大学の学生2名のボランティアを含め総勢27名が参加した。

PDハウス小坂の柳先生と田川先生の講演とリハビリ指導でパーキンソン病に特化して開発されたLSVT®BIGというリハビリを実際に行い、身体を大きく動かすことの大切さを学ぶことができた。また、金沢医療センターの音楽に合わせたリハビリも行うこともできた。相談会は、日頃の療養で疑問に感じることや療養で気を付けるべきことなどの質問があり、専門医およびリハビリスタッフが返答をおこなった。

4. 評価と今後の課題

リハビリの大切さを理解してもらい、楽しく身体を動かす機会となった。今年度はかほく市と金沢市での開催となった。来年度以降は、アンケートなどの要望にもあった能登地区での開催についても検討していく必要がある。リハビリの大切さがわかっても、継続して行うことが難しく今後の課題となっている。

また、交流会では、活発な意見交換ができた。コロナ禍ではパーキンソン病患者の交流する機会がなかったため、貴重な意見交換の場になったとのことであった。

実施後のアンケートでは、今回のリハビリ教室の開催を良かったとするものが大半であった。継続的な開催を期待するとの意見も多く、今後も金沢医療センターとの協力含めて、継続的な開催と参加者人数を拡大させた開催をコロナ感染状況も踏まえ検討していくことが必要であると考えられた。



2-1-4 わたしと地域の未来を変革する SDGs

企画担当：寺井 梨恵子 / 基礎看護学 准教授

1. 事業の目的

地域住民および学生が SDGs を理解し、身近な課題として捉え、「わたしができること」から先ずは始めるきっかけを得る。

2. 実施状況

実施内容としては、新たに「認知症世界の歩き方」を取り込んで開催した。感染拡大に伴い中止した回もあったが、計 9 回の開催と延べ 112 名の参加者があった。開催方法では、オンラインや対面開催など感染状況を鑑みながら開催につなげた。

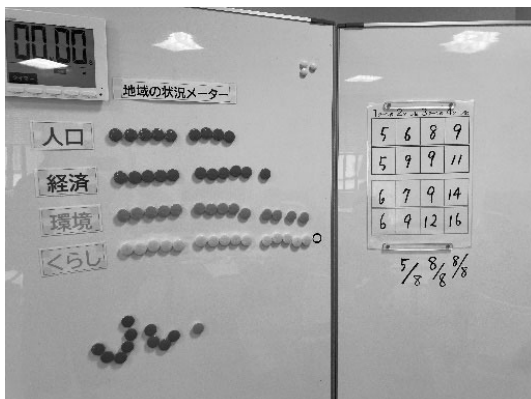
回	月日	時間	内容	参加者
第 1 回	R4. 4. 21	9:00-12:00	SDGs de 地方創生 ゲーム体験会 場所：本学 研修室 ファシリテーター：寺井梨恵子 サポーター：松本智里、瀬戸清華	計 8 名 1 年生 6 名 教員 2 名
第 2 回	R4. 5. 13	13:00-16:10	科目「地域と看護」 SDGs de 地方創生 ゲーム体験会 場所：金城大学公衆衛生看護学専攻科 ファシリテーター：寺井梨恵子	計 10 名 学生 7 名 教員 3 名
第 3 回	R4. 5. 21	9:30-12:00	認知症世界の歩き方 play!体験会 場所：オンライン(Zoom) ファシリテーター：寺井梨恵子 サポーター：公認ファシリテーター	計 13 名 高校生 1 名 大学生 5 名 教員 5 名 地域包括 2 名
第 4 回	R4. 6. 18	8:45-11:20	星稜高校 GSP SDGs de 地方創生 ゲーム体験会 場所：星稜高校 ファシリテーター：寺井梨恵子 サポーター：卒研究生	高校生 1~3 年生 19 名
第 5 回	R4. 8. 4	13:00-16:10	SDGs de 地方創生 ゲーム体験会 場所：本学 研修室 ファシリテーター：寺井梨恵子 サポーター：卒研究生	11 名 大学生 10 名 教員 1 名
第 6 回	R5. 1. 31	9:00-12:10	科目「地域と看護」 認知症世界の歩き方ダイアログ 場所：金城大学 看護学部 2 年生 ファシリテーター：寺井梨恵子	14 名 大学生 10 名 教員 4 名
第 7 回	R5. 2. 2	13:30-16:30	かほく市いきいき公開講座 認知症世界の歩き方ダイアログ 場所：七塚健康福祉センター ファシリテーター：寺井梨恵子	22 名

第8回	R5.2.23	9:45-11:45	認知症世界の歩き方ダイアログ 場所：かほく市図書館2階七塚生涯 学習センター視聴覚講義室 ファシリテーター：寺井梨恵子	7名 中学生、大学 生、一般
第9回	R5.2.23	13:30-16:00	SDGs de 地方創生 ゲーム体験会 場所：かほく市図書館2階七塚生涯 学習センター視聴覚講義室 ファシリテーター：寺井梨恵子 サポーター：松本智里、瀬戸清華	8名 中学生、大学 生、一般

3. 実施内容

(1) SDGs de 地方創生カードゲーム

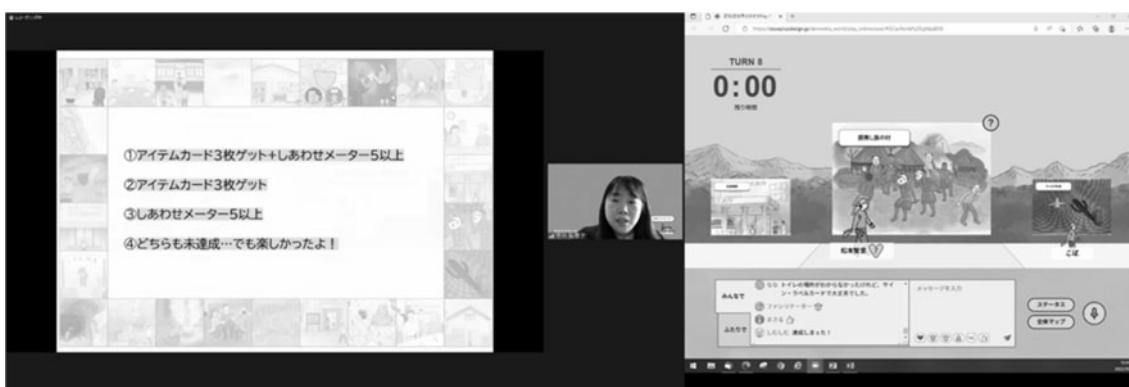
- ・back casting という考えが SDGs では取り入れられていることが理解できた。私もこの考え方をフィールド実習に活かしたい。ゲームの終盤（第4ターン）はフィールド実習を行う地区を意識して活動することが出来た。
- ・地域に対して自分の行動が悪影響を及ぼしていないか考えながら行動することの大切さを学ぶことができたので、今後、保健師として活動するときは、住民のニーズや希望を踏まえながら、それが住民や地域にとってプラスに働くのか、マイナスに働くのか考えて活動できるようにしたい。
- ・私は行政職員をしたが、最初から自分の目標を達成することしか考えておらず、これが最終的なまちの状況に影響したと感じた。目先の目的だけではなく、最終目標や全体を見ながら行動することが大切だと思った。
- ・ゲームを通して、まちづくりを継続して行うためには、行政や住民側のみで行っても、バランスが取れないことがわかった。継続的にそれぞれの立場や機関が協力することの大切さを感じることができた。
- ・ゲーム形式で楽しむことができる一方で、人材不足や経済面での課題など、シビアな現実が次々と浮かび上がってくる地方の状況を実感した。SDGs も地方創生も、それぞれ複雑な因果関係を持っていて、全ての問題を完全に解決する難しさを体験できた。
- ・SDGs は 17 個の目標一つ一つがつながっているのだと改めて実感できた。
- ・この世界の現状と今後の関係についての話は納得でき、とても興味深い内容だった。この経験を活かしてこれからの世界について積極的に知識を増やしたいと思った。
- ・カードゲームを通じて学年・性別関係なく話すことができてコミュニケーション力が高まったのでよかった。



(2) 認知症世界の歩き方

① play! (オンライン)

- ・認知症において『自立が阻害される』という印象があり、そこから認知症とは『考える・記憶する内容に多く作用される』と思っていたが、視覚・聴覚・味覚等などの知覚においても作用されている事を知った。
- ・認知症ではできないことやADL等の悪化傾向に目を向けられることもあると思うが、これまでの経験や知恵はその方の強みであり生活環境によって強みを打ち消すことのないような援助の内容と程度が重要だとわかった。
- ・認知症のご本人やりたいこと、目標を実現するために役に立つカードを集めようとしていると、出来事が次々に起こり、周りが障壁を理解してくれないことに傷つき、協力してくれて嬉しかったことを体験できた。認知症のご本人の幸せメーターが上がることは、家族の幸せメーターが上がり、社会全体の幸せメーターがあがることにつながっていく。



② ダイアログ

- ・当事者にとってはおかしいなと思いつつも、症状、困りごと自体が真実であることが理解できた。入浴を拒否したり、物盗られに固執したり、認知症の方によくみられる行動がなぜ起こっているのかわかった。
- ・今日使ったカードでは認知症の方自身も自分の状態を把握でき、家族も何ができて何が困っているのか理解できると感じた。カードゲームとても楽しかったです。



4. 評価と今後の課題

今年度は出張開催（高校、大学、大学専攻科、かほく市いきいきシニアの計4回）や学外（かほく市図書館内）での開催など、参加者の多様化につながった。

本学学生にとっては、HHC 対応事業として学内で参加できる機会にもなった。

引き続き県内教育機関や地域への広報活動を行う。

2-1-5 いきいき世代とつくる健康教室（地域公開講座）

企画担当：松本 勝 / 成人看護学 准教授

1. 事業の目的

- ① かほく市いきいきステーション（七塚健康福祉センター集会室）にて地域公開講座を開催し、看護大学教員の知見を市民に還元する。
- ② いきいきステーションに定期的に訪問し、学生・教員と地域のシニア世代との交流活動を行い、学生においては対象理解や地域のニーズ把握を促進し、シニア世代には社会参加の機会となる。

2. 実施状況

- ① いきいきステーションの協力のもと、地域公開講座を 5 回実施した。企画書をいきいきステーションに提出、開催概要を提示し、いきいきステーションからかほく市の広報誌に掲載、各回の参加者募集を依頼した。
- ② 新型コロナウイルス感染症の感染状況により、学生の活動は中止した。

3. 実施内容

①地域公開講座（全 5 回）

<第 1 回>10 月 3 日（月）13:30～15:00 担当者：松本勝 准教授

テーマ：「高齢者に多い症状「便秘」について知ろう」

参加者：13 名

<第 2 回>11 月 10 日（木）13:30～15:00 担当者：田村幸恵講師

テーマ：「新型コロナ・インフルエンザウイルスから身を守ろう！」

参加者：20 名

<第 3 回>11 月 26 日（金）13:30～15:00 担当者：室野奈緒子助教

テーマ：「あなたの血管年齢は何歳？血管若返り大作戦！」

参加者：37 名

<第 4 回>2 月 1 日（水）13:30～15:00 担当者：寺井梨恵子准教授

テーマ：「認知症世界の歩き方 ダイアログ」

参加者：22 名

<第 5 回>3 月 17 日（金）13:30～15:00 担当者：美濃由紀子教授

テーマ：「ストレスとその対処法について考えてみよう

～心の健康を保つために～」

参加者：30 名

感染対策のため、従来よりも広い会場を使用した。

各回参加者は 13～37 名となり令和 3 年度よりも増加している。

次年度のテーマの希望もあがっており、市民の健康生活への貢献は今後も必要と考える。

4. 評価と今後の課題

本年度は、開催時期をできるだけ早めようと試みたものの、初回が 10 月で最終回が 3 月ということで遅めの時期に開催という形になっている。回を増すごとに参加者は増える傾向にあり、12-1 月の降雪量が多い時期を避けることで参加人数を確保できていると考えるが、参加者にとってより参加しやすい時期を考えると、早めの日程調整をして予定通り 6 月ごろからの開催とできるとより良いと考えられる。

かほく市の広報誌、いきいきステーションからの案内により参加者が昨年度以上に多かった。また、参加者からは、ためになったという声もきかれ、健康への働きかけにつながっていると考える。本年度は本学担当者の提供可能なテーマ及び住民のニーズを参考に講話を企画した。次年度も同様に企画していきたい。



2-1-6 あかちゃんをお空にみ送られた方の自助グループに対するサポート活動

企画担当：米田 昌代 / 母性看護学 教授

1. 事業の目的

あかちゃんを亡くした方がアクセスしやすいような体制作りと会の広報、お話会開催によって、あかちゃんを亡くした方の自助グループ活動を支援する。また、個別相談体制、医療施設・行政との連携を強化していく。

2. 実施状況

- ① 広報：ちらし配布 希望時郵送 ホームページ更新 インスタグラム利用開始
- ② お話会のサポート：ひまわりの会、小さな天使のママの会（津幡町）、石川グリーフケアの会が開催しているお話会をサポートする。
- ③ 体験者からの直接の相談に電話・面談・メールで対応したり、他の体験者につないだりする。
- ④ 医療機関や行政の相談に応じる。
- ⑤ 全国のあかちゃんを亡くした方の自助グループ（天使がくれた出会いネットワーク）以外に、自らが中心となって天使ママの自助グループの集いを開催する。自助グループ同士の連携の強化をはかる。

3. 実施内容

- ① 小さな天使のママの会はメンバーを中心にインスタグラム利用を開始することによって、全国の天使ママの自助グループとつながることができた。
- ② ひまわりの会
開催日：4月24日(日)、7月24日(日)、10月23日(日)、1月22日(日)
開催場所：石川県社会福祉協議会
参加人数：各回5～6名
小さな天使のママの会
開催日：6月6日(月)、10月3日(月)、2月6日(月)
開催場所：石川県立看護大学（ハイブリッド開催）
参加人数：各回6～8名
グリーフケア・カフェ
開催日：5月21日(土)、7月9日(土)、9月23日(土)、11月26日(土)、
1月22日(土)、3月25日(土)
開催場所：シェアマインド金沢
参加人数：各回3～5名
- ③ 前年度の報告後からカウントすると2件のみの問い合わせであるが、現在も継続してメールで話を聞いている。継続的関わりが必要と考えられる対象である。
- ④ 個別に相談にのるとともに、12月には石川中央管轄の保健師さんを対象に自助グループ代表とともに、グリーフケアの研修を実施し、今後の連携のつながる活動とすることができた。
行政からの電話相談：2件
- ⑤ 天使ママの自助グループの集い
開催日：6月5日(日)、10月2日(日)、2月12日(日)
不妊・不育ピアサポーター養成研修
開催日：11月20日(日)、12月4日(日)

4. 評価と今後の課題

今年度は、ひまわりの会もお話会を対面で実施できた。参加人数、相談人数は少数ではあるが、話をして楽になっている方は確実にいることから、サポート活動を継続していく意義はあると考える。SNS やオンラインを活用し、お話会、相談体制を整え、今後もより一層、全国の自助グループや行政、病院とつながり、活動の輪を広げていきたい。

お子さんをお空へみ送られたみなさんに

一人きりで悲しみにくれないませんか？
み送られたお子さんのことやお気持ちを同じ体験をもつ方たちと一緒に語り合い、気持ちをわかちあいましょ〜。その中で少しでも光を輝かせるお手伝いができたらと思っています。体験者とともに医療者がサポートしています。

個別対応 メール・電話
お話し会の定期的開催 別途ご案内
以下に必ず連絡ください。

あかちゃんからおとなになってからみ送られた方まで幅広く対応いたします。

ひまわりの会 事務局 ☎090-2833-3427 (石川)
ホームページ <http://www.ishikawahimawari.asakura.ne.jp/>

あかちゃんをみ送られた方(漏産・死産・新生児死亡・乳児死亡)に対応いたします。

小さな天使のママの会 情報事務局 ☎090-4681-9378 (石川)
ホームページ <http://nanotenshi.jmdo.com/>

SIDS家族の会 北海道 札幌 ☎011-835-2411(会費がやまの会)
札幌支店 Mail: sids_hokkaido@postoffice.citile.or.jp (富山)
本 部 ☎010-3770-6341(会費がやまの会)
ホームページ <http://www.sids.or.jp/> (調いせわでつーん)

ハートシェアの会

天使のゆりかご 石川県立看護大学 看護・小児看護学講座内 窓口: 米田 晶代
Mail: mitsuyo@ishikawa-nu.ac.jp
ホームページ <http://www.ishikawa-nu.ac.jp/kyoboshou/ikikonomesennha/>

※天使のゆりかごは、上記4つの自助グループがパートナーと情報共有の構築をしています。相談窓口に落ちたら、まずメールでご連絡ください。支援者の相違にも対応します。

らつこのグループが連携してお子さんをお空へみ送られた方を支えています!!
石川県立看護大学附属看護ケア総合センター 地域連携課・看護事業によって自助グループ活動を支援しています。

グリーフとは?
大切な人や存在をなくした時におきる悲嘆とそれに伴う心や身体の反応のことをいいます。

石川グリーフケアの会とは
グリーフの知識を学んだメンバーが、グリーフの方のケアとグリーフというものを知ってもらうために、啓蒙活動や学習会・グリーフケアCafe・カウンセリングの活動をしています。

私たちの credo
① 私たちは守秘義務を実践し、グリーフにある方の状態に合わせて寄り添い、安心・安全の場をつくります。
② 私たちは、自分の経験を横におき、自己判断せず、グリーフにある方の成長を確してお話を聴きます。
③ 私たちは、自分たちの状態もいつもチェックし、感情を整えて場に集います。
④ 私たちは、哀しみは人生により良いものとなると信じて、その方の幸せを感得して関わります。

大切な人や存在をなくしたかたに

喪失体験からくる哀しみを
グリーフケアの場で癒しませんか？

お問合せ
代表 曾 朱希
電話 090-2838-3580
アドレス ishikawa.griefcare@gmail.com

メンバー
米田 晶代(石川県立看護大学教授)
水口 真理

石川グリーフケアの会

HP: <https://ishikawagriefcare.wissite.com/grief>

2-1-7 子育てどろっぷ・イン・さろん

企画担当：金谷 雅代 / 小児看護学 准教授

1. 事業の目的

継続的な支援の実現には、「何かあったらこの人に相談しよう」というような信頼関係を築くことが重要であり、そのためにはまずは親子と支援者が、または親同士が短期に集中して会い、お互いを知り合い分かり合う必要がある。「子育てどろっぷ・イン・さろん」は、育児困難に悩む親同士および支援者と親との信頼関係を育てながら親を継続的に支援していこうとするシステム(妊婦プログラム→乳児の母への Nobody's Perfect (以下 NP) 親支援プログラム→幼児 NP プログラム→フォローアッププログラム→本さろん)の最終段階の支援策である。子育てに悩みをもつ母を対象に、①エンパワーメント(自己効力感を高める等)②サポートし合う仲間づくり③自分に取り入れられそうな子育て等のやり方や考えを得る④自分の客観視⑤子育てへの不安や困難感の軽減⑥レスパイト・ケアの6点をねらいとし、子どもと離れて過ごす場所の提供と、悩みについて安心して話せるグループミーティングなどを行うことが目的である。

2. 実施状況

今回の実施は8/23～12/20の5回を実施した。コロナ禍でありながら、感染症対策をしながら、対面で実施した。

【実施した感染症対策】

- ・症状の確認、来場時の検温の実施
- ・参加者のマスクの着用
- ・テーブルでのアクリル板の設置、室内の換気、開始前後の使用物品やテーブルの消毒
- ・各テーブルに消毒液の設置、個包装の粉末飲料を受付時に選択。紙コップの使用、個包装のお菓子を個別の紙皿で配布。

- ① どろっぷ・イン・るーむ(午前)：託児を行い、母親には一人でまたは、他の参加者と自由に過ごす時間・場所を提供する。スタッフも母親の相談に対応した。
- ② 親育ち・子育てを考える会(午後)：Nobody's Perfect 親支援プログラム(以下 NP)参加経験のある母親を対象に、託児を行い、NP方式を取り入れたグループミーティングを全4回行った。

【スタッフ】西村真実子、米田昌代、金谷雅代、千原裕香、後藤亜希

・ファシリテーター

西村真実子(石川県立看護大学大学院 特任教授：NPNC 認定ファシリテーター)

千原裕香(石川県立看護大学 小児看護学 助教：NP ファシリテーター)

【実施場所】かほく市子ども総合センターおひさま

回数	開催日	るーむ 参加者	考える会 参加者	託児 児童数	実施形態
1回	8月23日(火)	9	10	8	対面
2回	9月13日(火)	6	8	3	対面
3回	10月4日(火)	8	8	7	対面
4回	11月8日(火)	8	4	7	対面
5回	12月20日(火)	9	5	8	対面
延べ合計(人)		40	35	33	

3. 実施内容

・どろっぷ・イン・る一む(午前)では、参加者が託児を利用しながら、他の母親と話をしたり、ゆっくりお茶やお菓子を食べてリラックスしていた。また、石川県立看護大学図書館から借りてきた本を設置した。ゆっくりと静かな時間を過ごしたい母親には、別室で本を読んだり、家から自分がしたいことを持ってきて写真の整理や入学の準備、勉強等で過ごしていた。子どもの年齢が近い母親同士で子どもとの関係や接し方が難しいことや、夫との関係でお互いの思いを調整する難しさを話されていた。

・親育ち・子育てを考える会(午後)では、それぞれの抱える不安や困っていることについて出し合い、母親同士で頑張っているところを認め合い、どうしたらよいかみんなで考える時間となった。最終回では「悩みの共有だけでなく、ただ、話せる場があると言うだけで、貴重でありがたかったです」、「毎回、名言を持って帰れます。答えはここでは出せないが、ヒントや導きが得られました」、「自分では抱えきれなくなっていたことを聞いてもらい、意見をもらい助かりました」、「前向きに考えることが出来ました」との感想をいただいた。

子どもの年齢によって困り感が違うため、子どもの年齢が近い母親達同士でグループの作り、共通の問題についてお互いに話せた。

これらのことから、同じような悩みを抱える仲間に受け入れられることにより安心感や心の余裕等が生じ、加えて悩みや経験・考えをサポーターズに共有する話し合いを通して、現実吟味/カタルシス/自分に取り入れられるやり方・考えの獲得等が起こり、日々の子育て等にプラスになり、子育て状況の悪化の防止になっていることが伺えた。母親それぞれの悩みに対し、専門職の教員であるため、次につなげる支援を実施できた。

「NP 親育ち・子育てを考える会」で話し合われた主なテーマ

- 1回目：「お互いを知ろう。自分の気がかり・みんなの気がかりを話し合おう」
- 2回目：「いらいら・子どもを怒りすぎてしまう等)」
- 3回目：「夫との関係」「子どもの反抗期・不器用さ」「仕事の両立」「男女差と世間の目」
- 4回目：「夫との関係」「子どもの反抗期・不器用さ」「親の介護・病気・お金の話等」
- 5回目：「きょうだいとの関係性と反抗期」「仕事の両立」「夫と祖父母の関係」



4. 評価と今後の課題

【どろっぷ・イン・るーむ(午前)】

スタッフ(教員)が専門職であり、また、さろんに参加する前に NP プログラムにも参加していることから、話しやすい雰囲気は自然とできており、敷居の低いアクセシビリティの高い母親への支援のひとつとなっている。かほく市との事業で幼児 NP と乳児 NP を実施しており、NP の参加者が NP 終了後の母親同士の交流の場となっている。

【親育ち・子育てを考える会(午後)】

・コロナ禍での子育てで母親の孤立化が進んでいる。ある母親は、「コロナで全然遊び場行けないし、友だちとご飯やお出かけできないので、他のお母さんと話す事で、ストレス発散が出来ない」、「子どもと家にこもりきりで毎日しんどい」と話されていた。コロナ禍で子育て広場や託児の使用制限があり、母親のレスパイトできる場所が激減している。広場等での母親同士のピアサポートも減少しているためコロナ禍での開催の必要性は高い。

・かほく市子育て支援事業の一環として、毎年、乳児 NP (2月) と幼児 NP (8月) の講師を本事業のスタッフである教員が担っている。乳児 NP に参加した母親が、幼児 NP に参加し、その後、このどろっぷ・イン・さろんに参加することが多い。特にハイリスク支援で気になる母親は、子育て広場に直接行くよりも、NP で知り合ってから深く子育てのことを話し合うことで、母親同士の人間関係もスムーズに形成されており、このような継続的な支援方法が効果的である。かほく市では約 10 年のどろっぷ・イン・サロンの取り組みの効果を実感し、本事業をかほく市子育て支援事業における継続支援としての位置付けとなった。

・しかし、ここ最近の問題として、乳幼児期の親を対象とした話し合いの場は子育て広場などいろいろあるが、思春期の子どもを持つ親が参加できる場は少ない。このどろっぷ・イン・さろんでは思春期を迎える子どもへの接し方や自分の更年期や親の介護について考えるには、子どもの年齢格差があり、参加する母親の十分な話し合いにつながっていないのではないかと感じた。母親の思春期の子ども特有の悩みが出現し、親と子の関係性だけでなく、子どもの友人同士の関係性の困難さが出てくる。友人とのトラブルから学校で馴染めず、不登校や自殺企図など深刻さも増している。学童期・思春期の母親に NP 手法を用いた支援について重点的に考えることが今後の課題である。

2-1-8 小・中・高校生と考える防災 ～知ろう災害、守ろう大切な命と生活～

企画担当：金谷 雅代 / 小児看護学 准教授

1. 事業の目的

地域で生活する児童生徒の防災・減災力を高め、活動を通して防災意識の向上を図る。

2. 実施状況

かほく市社会福祉協議会担当者と事業内容について確認し、ボランティア活動を行っている中学生、高校生に参加呼びかけの協力を得た。また、地域防災士や本学さくら会へも広報をし、参加者を募った。3回の講座を実施した。

【開催日時および参加状況】

第1回 日 時： 令和4年8月27日（土） 10:00～12:00

場 所： 石川県立看護大学体育館

テ ー マ： 避難所での睡眠

講 師： 武山雅志（石川県立看護大学 名誉教授）

協 力： かほく市社会福祉協議会、学園台防災士

参加人数： 6名

第2回 日 時： 令和4年10月16日（土） 10:00～12:00

場 所： 石川県立看護大学小講義室2

テ ー マ： 「食」と「水」

講 師： 武山雅志（石川県立看護大学 名誉教授）、金谷雅代

参加人数： 5名

第3回 日 時： 令和4年12月3日（土） 10:00～12:00

場 所： 石川県立看護大学小講義室2

テ ー マ： 避難所のトイレ事情・環境

講 師： 武山雅志（石川県立看護大学 名誉教授）、金谷雅代

参加人数： 3名

3. 実施内容

【第1回】

避難所となりうる場所の睡眠環境や眠れないことの弊害について考えた。実践として、4種類の段ボールベッドを組み立て、寝心地を体験した。

また、エアマットやコットなどの使い心地も体験し、よりよい眠りのための工夫を考える機会とした。

【第2回】

電気・水道・ガスが災害で使用できなくなった生活をイメージし、何に困るのか、代わりに工夫してできることは何かを考えた。災害時の水の重要性についても考えた。

生活水を様々な大きさの給水バッグに入れて持ち運んでみて、使いやすさを話合った。

【第3回】

日ごろから排泄は重要だが、災害時にはトイレが使えないこともあるため、災害用として段ボールで作成したトイレや、市販の災害時用トイレを組み立ててみた。

また、停電が発生した際にどのようにして明かりを確保するか、より明るくする工夫も試した。防災カードゲームを行い、消火器の使い方やAEDの使用手順なども確認した。

災害が発生しても、避難するだけでなく「健康な生活を維持する」ために必要なことについて、3回の講座を通して伝えた。

4. 評価と今後の課題

参加した児童生徒には、災害の恐怖を伝えることより、災害発生後の生活とその不便さに焦点をあてて理解してもらえるように講話し、ワークショップは楽しみながら体験してもらえた。災害時の生活をイメージすることにつながり、「自分たちにできること」を考える機会は提供できた。

中学生の試験時期を考慮して計画したが、参加のための移動手段がない子どもたちに大学に集合してもらうことは大変なため、子どもたちが参加しやすい場所を検討して、実施できることが望ましい。



2-1-9 モーニング Walk&Eat

1. 事業の目的

朝日を浴びて適度に身体を動かし、朝食をとる生活スタイルは、健康の維持・向上にきわめて重要な役割を果たすことが知られている。このような体験を、人のつながりを通して行うことで、活気や喜び、リラクゼーションなどの効果を生み出す。

2. 実施状況

開催日：令和4年7月16日（土）

コース全長：約3Km

実施場所：石川県立看護大学・道の駅高松

対象者：かほく市及び周辺地区の住民

参加者数：37名（全員完走）



ウォーキングの折り返し地点（道の駅高松 里海館）の様子

3. 実施内容

参加者全員が、石川県立看護大学から道の駅高松（里海館）までの往復約3kmを歩き、ウォーキング後には、朝食としておにぎりとかほく市の特産品であるデラウェアを配布された。

本学の垣花教授（健康体力科学）から「健康になれる歩き方」について、平居教授（機能・病態学）から「朝食を摂ることの重要性」について、講話を行った。

幅広い年代層の方にご参加頂いたことにより、本イベントが地域全体の健康づくりのきっかけになることが期待された。

4. 評価と今後の課題

コロナ禍でのイベント開催となったため、朝食としてのおにぎりを自宅へ持ち帰ることになった。そのために、朝活としての運動および食事の効果を実感することは難しかった。コロナ禍明けに、本イベントを再び開催することが必要である。

2-1-10 スマート ウォーキング

企画担当：垣花 渉 / 健康体力科学 教授

1. 事業の目的

「スマート ウォーキング」と題し、手軽に筋力や全身持久力を向上できるウォーキングの体験会を、学官連携で提供する。

2. 実施状況

第1回 開催日：令和4年6月12日（日）

コース全長：約3Km

実施場所：石川県立看護大学周辺

対象者：かほく市及び周辺住民

参加者数：32名（全員完走）

第2回 開催日：令和4年10月8日（土）

コース全長：約3Km

実施場所：石川県立看護大学周辺

対象者：かほく市及び周辺住民

参加者数：10名（全員完走）



3. 実施内容

事業代表者は、かほく市およびその周辺に住まわれている方を対象に、早歩きとゆっくり歩きによる30分間の運動を、大学周辺の緩やかな起伏のあるコースを作り、「スマート ウォーキング」と題して実施した。

連携団体のかほく市健康福祉課は、「スマート ウォーキング」への参加者を募るため、市の広報誌をとおして参加を呼び掛けた。

また、「スマート ウォーキング」の認知度を高めるために、事業代表者は歩き方の特徴、消費カロリーなどの運動負荷、ウォーキングコースの概要を記したパンフレットを作成し、市健康福祉課はパンフレットを印刷して参加者へ配布した。

4. 評価と今後の課題

今後の課題は、イベント参加者が密になることを避けながら、「スマート ウォーキング」を継続的に実施する体制を整備することである。そのためには、行政との連携を続け、住民へのイベント周知が欠かせない。



3-1 JICA日系研修

「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」コース

担当：中道 淳子 / 老年看護学 准教授

この研修事業は独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、石川県立看護大学と羽咋市社会福祉協議会が実施運営する。中南米日系社会支援の一環として平成19年度から開始され、令和元年度に13期の研修生を受け入れた。14期目より、コロナ禍にあり、研修員の来日が叶わず、遠隔研修を行っている。今年度は遠隔研修3年目であった。

1. 研修目的

高齢者福祉制度や日本の伝統的な文化、ケアシステム、介護予防について学び、高齢者福祉対策の組織的な対応を行うための仕組みや機能の重要性について幹部層の（知識と）意識の向上を促進する。

2. 研修実施体制

- (1) 研修コース名：「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」遠隔特別プログラム
- (2) 技術研修期間：2022年9月1日から 2022年9月20日まで
- (3) 研修員名：エンカルナシオン：赤城由美子、井上都子
エステ：田邊愛子
ブラジル：嘉悦 ペトロス・ケイ フェルナンデス

3. 研修内容（スケジュール参照）

日本の高齢社会で明らかになってきた介護予防に関する知識を習得できるよう、①～⑨についてオンライン学習後、Zoomにて質疑応答を行う。

日程		内容	受講方法
9月1日	木	20:00～21:00 開講式及びオリエンテーション	Zoom
9月2日	金	動画で学ぶ I	YouTube 上の5つ動画を9/6までに視聴し、動画を見てわからなかったことや、これらのテーマに関連したボランティア活動上の悩み等をまとめる。
9月3日	土	① 日本の高齢者の生活・実態を知る（中道）	
9月4日	日	② 加齢変化を理解する（中道）	
9月5日	月	③ 高齢者の生理学について理解する（平居）	
9月6日	火	④ 栄養学の基礎の基礎的理解（平居） ⑤ 高齢者の栄養ケアについての理解（平居）	
9月7日	水	20:00～22:00 オンライン質疑応答	Zoom
9月8日	木	動画で学ぶ II	YouTube 上の4つ動画を9/12までに視聴し、動画を見てわからなかったことや、これらのテーマに関連したボランティア活動上の悩み等をまとめる。
9月9日	金	⑥ 健康寿命や介護予防の概念を理解する (塚田)	
9月10日	土	⑦ 高齢者の運動についての理解（塚田）	
9月11日	日	⑧ 高齢者の体力測定についての理解（中道）	
9月12日	月	⑨ 楽しい地区活動例（羽咋社協）	
9月13日	火	20:00～22:00 オンライン質疑応答	Zoom

9月14日	水	自主研修（移住地ごとの話し合い）	
9月15日	木	自主研修（移住地ごとの話し合い）	
9月16日	金	20:00～22:00 意見交換 「日系社会における介護予防活動の展開方法 について考える」	Zoom
9月17日	土	自主研修（パワーポイント作成）	
9月18日	日	自主研修（パワーポイント作成）	Mailにて事前提出
9月19日	祝	自主研修（パワーポイント作成）	
9月20日	火	20:00～22:00 成果発表及び閉講式	Zoom

4. 研修目標・評価指標

(1) 研修目標

日本の高齢社会で明らかになってきた介護予防に関する知識を習得し、健康寿命の促進に向けて現地での活動に活かしていくことを目指す。

(2) 指標

日系社会で高齢者福祉のシステムや人材育成に関して、個人的なスキルアップのみならず、組織的に今後のことについて取り組んでいくための具体的な活動を計画できる。

5. 達成度

研修最終日の成果報告において、地域ごとに今後、取り組む内容について発表できた。

エステでは、研修員1名でしたが、次のようなアクションプランが作成できた。

若い人は仕事をしており、わざわざ集まるのが難しいため、行事の時や、行事の準備に来ている時に以下のことを行いたい。

1.高齢者の方々への簡単な体力測定やフレイルチェック：これまでの集まりでは医師や近隣大学の学生に測定など協力してもらったので、今後も相談していく。

2. 介護予防のための簡単な体操を一緒に行う：足腰などだけではなく、食べ物を食べたり、呼吸をしたりすることが大切だと思うので嚥下体操なども取り入れる。楽しみながら行えるよう、歌体操などを取り入れる。

3. パンフレットの配布（身体の変化や対応など）；若い人やパラグアイの人にも関心を持っていただけるよう、日本語にスペイン語訳をつけたパンフレットを作成する。日本食祭りの際などに配布していく。

エンカルナシオンでは、2名の研修員によって、今後の目標が3つ掲げられた。

1.婦人部で活動計画を提案する①歯の健康チェックの実施②咀嚼嚥下機能を高める為の運動を実施する③体力測定（新体力テスト）を青年部も協力を要請2月ごろ実施④指輪つかテストを誕生会で実施⑤いきいき100歳体操を紹介し、実行可能性を検討する⑥ラジオ体操、毎日・3分体操、踊りを茶話会などで実施⑦イレブンチェックを忘年会で実施

2.婦人部内で福祉ボランティアグループを提案する。又日本人会員、青年部にも送迎などの協力を要請する。

3.日本人会役員、あけぼの会役員、婦人部役員を交えて、これからの福祉活動の方向性についての話し合いの場を作る。

ブラジルから参加の研修員は、病院のインフォメーションセンターと面会受付の多言語担当受付スタッフとして勤務しており、今後の計画としては、高齢者と要介護について記載したチラシの配布を発表された。高齢者の姿は、人がいずれ迎える道であると伝え、健康維持と要介護の重要

性を説くことを考えているが、内容を医師や病院の広告部の方に確認してもらって実施する必要がある。内容を確認していただき、チラシ配布の許可が出た際には、数多く来院して来られる患者やその付き添いの方にチラシを配布したい。高齢者に関する内容を SNS でメディアに拡散させ、思想や考えを改める機会にしてもらいたい。

6. 研修コースに対する所見

(1) 研修期間、研修内容について

動画の内容は昨年度とほとんど変わっていない。基本的に1週間で4~5本の動画を見て、学びを進めていくものである。動画は加齢や介護予防の知識をつけるものと、羽咋市の実際の様子を知る内容のもので構成されている。動画は何度でも繰り返し見ることが可能という点で、今回も講評であった。

昨年度同様に約3週間という期間でちょうど良いのではないかとと思われる。

(2) 研修効果を高める工夫

研修員の日本語能力では、日常会話はできるものの、資料の漢字などがわからないことがあったため、オンライン教材は、できるだけ平易な表現とし、漢字にはルビをうって対応した。限られた質疑応答の時間を有意義にするために、質問や感想をあらかじめ締め切りを設けてメールで送っていただき、大学教員と羽咋市社会福祉協議会のスタッフとで担当を決めて、回答やコメントをスムーズにできるように準備を進めた。

昨年の意見を基に、今年度はZoomでの質疑応答では、全て録画をしておくこととした。結果、その時の録画を研修後に見返して復習が出来てよかったとの声も聴かれた。

(3) 研修運営体制について

研修実施機関である看護大学と羽咋市社会福祉協議会、JICA北陸の3機関で協力・連携して実施できた。また、JICA北陸スタッフには研修中にもオンライン環境や修了証など細々とした面で研修運営をサポートいただいた。

7. その他、特筆すべき活動実績及び成果

遠隔研修では初めて、パラグアイ以外の国からの研修生の受講があった。

前年度の研修生から、研修を活かして高齢者宅への訪問活動の報告があった。

2022JICA 日系研修閉会式 (Zoom スクリーンショット)



4-1 かほく市との包括的連携協定に関わる取り組み

企画担当：塚田久恵 / 地域ケア総合センター センター長（教授）

1. 事業の目的

本学は、平成22年10月にかほく市との間で締結した包括的連携協定にかかわるさまざまな事業に取り組んできた。この協定は、かほく市の健康推進をはじめとした豊かな地域づくりにむけて看護大学が支援・協力を行うとともに、看護大学の教育・研究活動が充実するようかほく市に支援いただく、いわば双方向の協力を企図して締結されたものである。

2. 実施状況及び内容

今年度は本学が幹事となり、2回の協議会を開催した。

5月31日（火）第1回協議会：令和3年度の事業実績報告および令和4年度事業案

12月20日（月）第2回協議会：令和4年度事業の進捗状況報告と令和5年度の計画立案

今年度は、かほく市から13事業、石川県立看護大学から2事業が提案され、感染予防に十分注意の上、開催方法を工夫し、事業を実施することができた（表1）。なお、本学から提案された「高齢者と看護学生との交流事業」については、昨年度と同様、対象者宅への訪問は中止し、代替活動として、1月に学生から対象者への手紙による交流を実施した。また、かほく市から提案された「通いの場における介護予防事業」については、事業計画に伴う講師の変更があり依頼はなかった。

表1 令和4年度「かほく市と石川県立看護大学の包括的連携」事業

	主催	事業(市担当課)	看護大担当
1	かほく市	かほく市ケーブルテレビ事業（情報推進課）	垣花教授他
2		健康ブランド化事業（健康福祉課）	垣花教授
3		発達障害に関する相談事業（健康福祉課）	大江講師
4		いきいきシニア活動推進事業（長寿介護課）	松本勝准教授他（地域公開講座）
5		地域支援事業（長寿介護課）	中道准教授 金子准教授（会議への参加）
6		通いの場における介護予防事業（長寿介護課）	—
7		家族介護者教室（長寿介護課）	武山名誉教授
8		かほく市民体力テスト（スポーツ文化課）	平居教授
9		ウォーキング事業（スポーツ文化課）	垣花教授
10		問題を抱える子ども等の自立支援事業(学校教育課)	武山名誉教授
11		教育相談事業（学校教育課）	武山名誉教授
12		妊娠期から切れ目のない育児支援事業（子育て支援課）	米田教授
13		地域伝統の発酵食品を使用した健康発酵食弁当の開発 （産業振興課）	平居教授
14	看護大	高齢者と看護学生との交流事業（長寿介護課）	金子准教授
15		小・中・高校生と考える防災（防災環境対策課）	金谷准教授

「いきいきシニア活動推進事業」では、今年度もコロナ感染対策を講じ、会場を広くするなど工夫し、5回実施した。第1回は10月3日「高齢者に多い症状「便秘」について知ろう」松本勝准教授、第2回は11月10日「新型コロナ・インフルエンザウイルスから身を守ろう」田村幸恵講師、第3回は11月28日「あなたの血管は何歳？血管若返り大作戦」室野奈緒子助教、第4回は2月1日「認知症世界の歩き方ダイアログ」寺井梨恵子准教授、第5回は3月17日「ストレスとその対処法について考えてみようーこころの健康を保つためにー」美濃由紀子教授がそれぞれ実施した。

3. 評価と今後の課題

令和4年度は感染予防対策に十分注意しながら事業を開催できた。今後とも、地域の人々がより健康な生活ができるよう、本学の知恵と技術を活かした事業を検討していきたい。

また、かほく市の生涯学習課、健康福祉課、長寿介護課といった各課の垣根を越えた事業の実施や研究フィールドを広げるきっかけにもなるような取組についても検討していきたいと考える。

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事業報告書（第20巻）

令和6年1月発行

発行：石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

〒929-1210

石川県かほく市学園台1丁目1番地

Tel.076-281-8308 Fax.076-281-8309

© 2015 Ishikawa Prefectural Nursing University.
All rights reserved.

著作権は石川県公立大学法人に帰属する。

